

序章 農本主義研究上におけるアナキズム研究の必要性とアナキズム研究上における農本主義研究の必要性

第1章 前史——大正9年頃まで

第2章 萌芽期——大正10年～13年頃

第1節 情況

第2節 アナキズム運動の農村への関心

第3節 農民文芸会の発足

第3章 農民自治会と自連派——大正14年～昭和4年頃

第1節 情況

第2節 農民派の活動と思想——その1. 農民自治会

第3節 農民派の活動と思想——その2. 第1次『農民』

第4節 農民派の活動と思想——その3. 第2次『農民』

第5節 自連派の農村運動論

第4章 農民派の全盛期（昭和4年～6年）

第1節 情勢

第2節 農民派の動き

a) 犬田卯

b) 鎌田研一

c) 加藤一夫

d) 延島英一

第3節 自連派の動き

第5章 運動再編成と路線転換（昭和6年～10年）

第1節 情勢

第2節 農民派分裂

第3節 自連派の変化

第6章 農村運動論の考察

第1節 主張の特徴

第2節 農村運動論の成立

第3節 アナキズムと農本主義

序章 農本主義研究上におけるアナキズム研究の必要性和アナキズム研究上における農本主義研究の必要性

ここ十数年間に多くの農本主義研究が発表された。発表された研究を分類整理する試みも何度か行われてきた。農本主義については長い間桜井武雄の講座派的規定が大きな影響力をもってきたが、それを考え直すべきだとする論がぞくぞく登場してきた。桜井は農本主義を「この国の資本主義が依拠してきた基本地盤たる農村の半封建体制を代表・擁護礼讃するものにほかならなかった」（1935年、p 73）と断罪し、容赦なく切り捨てている。しかし農本主義が歴史上左翼のイデオロギーよりも農民に受け入れられた事実の理由を追究する必要や、農本主義がもつ近代合理主義批判の要素に対する見直しがいわれているのである。また今日、農本主義のある部面を復権しようという提唱もいくつかなされている。たとえば、その地主保護の反動的な側面は否定するが、橘孝三郎の農業経営は日本の風土においては合理的有効的である（飯沼二郎）、または共同体・部落の積極的評価論（守田志郎）など。

長く農本主義に取り組み多くの農本主義者を見てこられた綱沢満昭氏は次のように定義している。「農本主義とは、農業、農民、および村落共同体に人間の生存にかかわる絶対的価値を付与し、それをもって国家存立の基盤としながら、その基盤をおびやかすものに対して立ち上がり、対抗的に展開する思想のことである。」（1983年、p 149）。このような定義が与えられる農本主義とは、具体的に何をさしているのであろう。綱沢氏の農本主義研究の対象人物を見ると、権藤成卿、橘孝三郎、加藤完治、石黒忠篤、横井時敬、後藤文夫らが典型とされているようである。他の多くの研究者も同様である。ここから、農本主義とファシズム、国家主義との密接な関連が出されるし、天皇制と癒着したものと捉えられる。すなわち、農という産業の重視・農を本位とする社会という狭い「農本」以外に、地主制の半封建的秩序の維持・擁護や日本国家の特殊的性格等の政治的なニュアンスが加わった農本主義解釈が行われるのである。政治的な意味に加えて、農本主義が「非合理の世界」ととらえられるのも、以上のような対象人物の研究によるものと思われる。

ところが、同じく「農本主義」の語によって典型的人物とは異質の人物が扱われる場合が多々ある。たとえば大井隆男氏は『農民自治運動史』において農民自治会の思想「農民自治主義＝農本のアナーキズム」は「農本主義・無政府主義・人道主義を基本とする」が、この場合の農本主義は「国家主義ないし皇道派的運動における思想のひとつ、……あるいは天皇制を深部から支え維持した一つの思想」としての農本主義ではなく、自主・自由・反国家の思想をさし、無政府主義とは黒色テロリズムのそれではないと限定されている。農本主義の重要な特徴としてしばしばあげられる国家主義・天皇制との結合のない「農本主義」をいうのである。（1980年、p 427-8）また綱沢氏は石川三四郎をとりあげて、論理的に結合はあり得ないとしながら、彼におけるアナーキズムと農本主義の結合を指摘している。（1979年、p 182-192）また秋山清氏は、昭和5～6年のアナキズム系詩人間の論争

に関して、農本主義とアナキズムが区別されていなかったことが根底にあると指摘している。(1967年、p53)等々。

以上のように、農本主義は、しばしばアナキズムとの境界においてその範囲のあいまいさを露呈し、国家主義的な特徴に動揺をきたすのである。アナキズムと農本主義の不分明を見る例はまだいくつもあげることが可能である。橘孝三郎が影響をうけた人物であるトルストイやカーペンターは、ある書ではアナキストと呼ばれ、ある書では農本主義者とされている。農本主義者が集まったとされる日本村治派同盟・農本連盟には、ボル派とされる人物はひとりもいない一方でアナキストと自称する人物が多数参加していた。さきほどの綱沢氏の定義でいうならば「国家存立」の部分を除けば、さらに多くのアナキストが農本主義者に数えられよう。農本主義とアナキズムは一般に別のものとされ、時には正反対の主張であると考えられているのであるが、共通する部分が大いのではないかと疑わざるを得なくなる。そもそも農本主義もアナキズムも、まだその定義が定まっておらず、ある人物がそれに該当するか否かを判定することさえできない状況なのである。

農本主義研究において、従来アナキストがとり上げられる時は農本的として片付けられてその深層が探られなかった傾向があるように思われる。またアナキズム史研究においては、分野全般にわたって取り組みが少ない上に、労働組合運動や文学運動に限定されてきた。特に昭和期においては劣弱なアナキズム陣営ではあったが、運動全体中の農村の比重は、ボル陣営のそれに比べて大きかった、それにもかかわらず従来農村運動・農民運動論は等閑視されてきて、全く様相が不明であった。農業・農村に特別の価値をおくという意味での農本主義と、自主自由反国家のアナキズムとが重なっている領域を研究すれば、農本主義の意味をより明確にし、同時にアナキズムの研究を深める上にも役立つであろう。以下において、アナキズム陣営の農村運動論を取り上げる所以である。

次章からは大正10年から昭和10年までの、アナキズム系に数えられた運動体、人物の思想と運動を時代にそって目を通し、そこにあらわれた主張を分析したい。その際ことわっておくべきことがいくつかある。アナキズム系の人物と外部から見做された者の中には当人自身はそれを否定していた者が存在すること。アナキズム系の雑誌においては誌面に意見の不統一がそのままに掲載される傾向があり、各記事を細かく分析することは記事間の矛盾に足をとられがちとなるから、主張を大きく傾向としてとらえる方法をとったこと、記者名が不明の場合が多いこともその一因である。また、通常文学史の領域として語られる文学運動を文学運動が専ら政治的に動いていたことから社会運動として考察の対象としたことである。なぜなら、当時は、文学は文学または芸術そのものとして価値をもつものとされず、政治的な運動の一手段として考えられる傾向が濃厚で、文学運動は文学にとどまっていたはずはならず社会運動に進出するか社会運動と共に歩むとかすべきだとされていたからである。(秋山清『アナキズム文学史』)

なお、農民自治主義、無政府重農主義を唱えた雑誌『農民』を中心とする人々を「農民派」と呼ぶことにする。初期には農民自治会を含み、アナキズム内が自連派(純正アナキ

ズム) と自協派 (サンジカリズム等) に分裂対立した時代では自協派に数えられたといえよう。一方を「自連派」と呼ぶことにする。これは労働組合の連合体である全国自連を中心とし、『自由連合』(のち『自由連合新聞』と改題)、『黒色青年』『黒旗』等による人々である。

第1章 前史——大正9年頃まで

本章では、次章以下の農村運動論が唐突に出現したのではなく、前史的に種々の前提があったことを確認しておきたい。小作人組合が作られ小作争議が闘われるという実際運動が既に早くから存在したのは勿論であるが、次章以下との関連で運動自体よりも重要なのは社会主義者の農村論と、文学の分野で顕著であった民衆芸術論や自然生活への関心であろう。

明治20年代から40年代、土地所有の問題が大いに論じられた。(桜井『日本農本主義』1935年参照) 明治24年にヘンリー・ジョージの「進歩と貧窮」が翻訳されて以来、土地は天然に存在するものであるから地主の私有に委すべきでなく全人民の共有財産である、という土地共有論が、単税太郎の称ある築地の宣教師ガルストの単税論遊説もあずかってひろく広められた。土地を地主の私有から全人民の共有財産とするために、土地にのみ租税を課すべきだ(単税論)というのがその論旨であったが、当時はその著者ヘンリー・ジョージの地主に抗する自由主義ブルジョア的意図と違って、労働者・農民に影響を与えたのであった。土地共有論の影響を受けた宮崎民蔵は明治35年に「土地復権同志会」を創立し大逆事件頃まで運動をつづけ、彼の「土地均享論」は小作農の間に広まったという。他の社会主義者も地租軽減論は地主の利益に関するもので小作人の利益には与らず、土地の所有こそが問題であることを論じていた。しかし一般に社会主義者は、労働者については、中層以下の農民の問題について論じることがなかった。その思想の輸入的性格、彼らの居住地が都会にあったこと等が理由となっているのであろう。農民問題解決についての議論は土地を将来国有にすべきであるという点より出なかった。

その中で、ごく初期のアナキズムの農民運動論というべきものに赤羽一の『農民の福音』(明治43年)がある。このパンフレットの秘密出版のために著者は捕えられ、獄中のハンガーストライキによって30代の若さで亡くなっている。この書では地主の土地所有の不当性と地主に対抗する運動の必要性を説くのはもちろんであるが、今後の議論の関連で注目すべきは、農業を他職業と異なった特殊な高貴な仕事としていることである。「社会と人との関係、若くは人と人との関係ではなくして、人と土地、若くは、人と自然の関係であるから、其の間に掛引算略を弄する必要」はない、「自然に於ける農民の地位は極めて高貴雄大」と、労働対象が自然であることに由来するすばらしさを述べているが、このような農業の特殊性について以後さかんに論じられることになる。それにもかかわらず「社会上農民の身分は頗る卑賤醜陋である」(p26)そこに農民が立ち上がる必要があるとして農民の

特殊な本質と現実を指摘する。もう一つ注目すべきは、現社会を改造するには「農民と都会の労働者と相協一致して、其の共同の敵たる地主と資本家を斃す外はない。……田舎の農民と都会の労働者と利害関係を異にする如く考へては大間違ひである」(p 29-30)としていることである。都会労働者の運動との関係の問題は、赤羽においては単に利害を共にし共闘すべきことが論じられているのみであるが、次章以下で次第に論議が深められるようになる。

次に、大正5年頃からさかんになった「民衆芸術論」が、特に農民派につづく系譜として忘れられてはならない。論者としては、本間久雄、富田碎花、加藤一夫、中村星湖らが有名だが、中でも大杉栄がロマン・ローランの紹介等で活躍したことは特筆されよう。民衆が芸術を持つためには、芸術を持てる状況にある民衆を作らねばならない、という大杉の直接社会運動につながる主張をはじめ、各論にはバリエーションがあるが、文壇芸術でない「民衆芸術」の必要性が広く論議されたこと自体の意義は大きい。民衆といえば日本においては数の上からいってまず農民が念頭に浮かべられるのは当然で、そこから「日本に於ける民衆芸術はまず農民のための、農民によつての、而して農民を生かし、農民に開かるる清新な天地でなければならない」(吉江喬松)という言葉が出てきた。大正11年のシャルル・ルイ・フィリップ13周忌記念講演会を契機に農民文芸研究会がつけられたとき、そのメンバーに民衆芸術論の論者が何人かはいていたのは、以上のような文学的思潮があったからであった。

もうひとつ文芸・思潮上の問題として、民衆芸術論とも深い関連をもつ「自然生活」「田園」への関心の存在も重要であろう。たとえば『中央公論』で大正6年7月に「自然生活号」10年7月に「都市と田園号」の特集号が出されたことにも窺えるように、次第に肥大化し、内部矛盾が顕著になってきた都市との対比で、美しい田園生活が、都市居住者の間で憧憬されることがあった。これには日本の現実と相俟った西洋思想の紹介があずかって力があり、トルストイ、カーペンター、モリス、ソーローに関する紹介、研究がぞくぞくと出された。この論者は民衆芸術論の論者と重なっている。農民ではない者たちが、都会はだめだ、自然は偉大だ、土だ大地だと唱い、半農半筆生活のカーペンターや森の生活のソーローに憧れるという風潮で、反体制的雰囲気は乏しく農民とは無縁のところであったが、この関心が民衆芸術論と相俟って、また現実に民衆が舞台に登場してくることによって、農民文学は文筆家の見た田園風景でなく農民の目で見た田園生活を書くべきだとする論を生む土台のひとつになったのである。またこの関心は、カーペンターをはじめとする近代文明物質文明、都市文明に対する文明批判と表裏一体のものであったことも見すごせない。

以上、現実の地主対小作の抗争以外に思想的に地主の土地所有を不当視する土地問題論、農民の他産業労働者に対する本質的な特殊性と労働者との共闘論が明治期に既に存在したこと、民衆芸術論・田園に対する憧憬が大正期にさかんであったことをざっと見てきた。これらの論議は、大正10年以降の農村運動論に直接間接に影響することになる。

第2章 萌芽期（大正10年～13年頃）

萌芽期を大正10年より13年頃としたのは、経済史文学史農民運動史等から借用した時期区分によるものではない。アナキズム運動もしくはアナキズム系と目された農民文学運動等の動向によって、およそ一つの時期が画されると考えられるので、このように分けたのである。以下の時期区分も同様である。この時期は、実際の農村運動はまだほとんど存在しないが、論議についてはまとまっていはいないものの次の時期から展開される運動論の芽が出そろっているという意味で、正しく「萌芽期」にあたる。

第1節 情況（大正10年～13年）

大正9年からの戦後恐慌によって農村経済が次第に悪化していく時期である。地方によっては小作争議が激発し、不況による地主の外部投資失敗、米価低落、商工業の賃金と農家収入の差の拡大、相変わらず農家に重い租税負担、等に農村問題が注目されるようになった。そこで政府も、農産物価格安定のための米穀法（大正10年）、小作争議に対する小作制度調査会設置（大正12年）、小作調停法（大正13年）、土地改良事業等の農業政策を行わざるをえなくなる。

小作争議の増加を背景に日本農民組合（日農）が創立されたのは大正11年であった。創立は杉山元治郎、賀川豊彦の呼びかけによるものである。当初は当時盛んであったアナルコサンジカリズムの農村への進出を危惧し、農民一揆的な運動ではなく穏健な組合による農民運動を進めるために作られたのであった。幹部にはキリスト教的人道主義の立場の者が多く明確に暴力否定をうたい、地主敵視をさえ避けようとしていたのである。しかしいったん日農ができあがると小作争議の現実に直面してその論調は地主に対する対抗・敵意へと変化せざるをえず、やがてマルクシズムの活動家が増えていき、日農は無産政党結成に大きな役割を果たすに至る。設立の後2～3年間は地主対小作の抗争関係の記事・論文以外に「近代の都会中心文明」「物質文明」に対する批判が機関紙『土地と自由』紙上に散見される。特に大震災直後には東京市街の被災はまちがった文明が天罰によって破壊されたのであるとする論さえ見られ、震災救済についても都会が優先され農村が無視されているという論議が見える。マルクス主義イデオロギーの支配する以前には、対地主の闘争論と並行して農村と都会を対立的に見る見方があったことを示しているといえよう。（日農については第2節で再述する）

思潮の上では室伏高信らの文明批判論が登場する時期であり、文学史の上ではいわゆるプロレタリア文学が成立する時期である。ヨーロッパにおいては、都市の発達に伴う矛盾が明らかになっていくところへ第一次大戦による文明的建造物の破壊によって文明のもろさを見せつけられ、永遠なるものは自然であり、人間の営みの中では農業であるとの念が深まった、といえよう。そうした思潮の輸入に加えて、今回日本の関東大震災によって東京周辺が壊滅的打撃をうける体験が重なった。受けとめ手によっては文明の崩壊を予感さ

せることになったのである。プロレタリア文学は、ロシア革命以後、次第に明確にマルクス主義を指導理念としていくのであったが、その際マルクス主義理論の影響で、主な対象を労働者としていたため、ブルジョア文学に対立するものとして発展していくと同時に、やがて農民を対象とする農民文学との相異をも明らかにされていくことになる。

さてアナキズムの農村運動論を見るためにアナキズム運動を概観することは欠かせない。この時期は日本のアナキズム史上最盛期といえよう。大正 10 年から 12 年頃、労働運動においてアナルコサンジカリズムが優勢であったことは周知の事実である。大正 9 年 5 月に結成され 10 年 6 月に分裂した労働組合同盟会においては、自由連合派とよばれるアナキズム系組合が決定的勢力であったし、結局不成立に終わったが全国労働組合総連合の結成大会（11 年 9 月）で組織形態をめぐって自由連合論と合同論が激しく火花を散らした時期であった。この当時労働運動の場でアナルコサンジカリズムと対立していたのは日本労働総同盟（10 年に友愛会から改称）であったが、総同盟の内部に労農ロシアを擁護するボル派が勢力を広げつつあったので、世にアナボル論争として知られる対立となったのである。運動において優勢な時代には優勢な状況にひかれて青年が多く参加するという事態は一般に見られるところであるが、アナキズム運動についても然りで、その後の運動ではこの頃に参加した者が多いことが特筆されよう。

12 年の 9 月の大震災ではアナキズム運動は大杉栄という大きな存在を失った。その後労働運動へのマルクス主義の影響力増大、14 年の普選法案通過へと歴史が流れる中でアナ系の労働運動は退潮の途をたどり始める。同時に大正 12 年、13 年は、大杉と共に労働運動社で活動していた和田久太郎と村木源次郎、そしてギロチン社の面々によるテロリズムの時代であった。ギロチン社の若いテロリストたちの思想はアナキズムのみとは言いかねる点もあるが、世間一般から、またアナキストたちからもアナキストと認知されていたことはまちがいない。ロシア革命運動のテロリストの印象が強烈に存在したところへ、アナキズム即テロリズムの印象を再び焼きつけた事件であったといえよう。

第 2 節 アナキズム運動の農村への関心

〔第 2 次『労働運動』大正 10 年 1 月～6 月、13 号〕手にとれる限りの資料の中で農村問題に関して論及されているもっとも早い時期のアナ系雑誌は『労働運動』である。『労働運動』は第 5 次まで出るが、第 1 次（大正 8 年 10 月—9 年 6 月）では小作争議の増加を報じる記事しかない。第 2 次以降次第に農村問題の記事が増加する。ちなみに第 2 次は大杉が対立相手のボルの伊井敬（近藤栄蔵）、高津正道を加えて発行したことで有名である。

1 号よりしばしば「農民問題」欄が設けられ、多くは岩佐作太郎によって担当されている。内容は小作人組合や小作制度調査の記事などで、特にアナ系の特徴の表われたものはない。「今迄の社会運動者は一向農村を顧みませんでした。今後は、これ等の点を□□□（三字不明）の上、農村にも宣伝下さるよう」（第 2 号〔大正 10 年 2 月 1 日〕p 5）とか「君等は常に中央集権の非を説きながら、いつでも同志は都会に集中する悪癖がある。」（第 3

号〔大正 10 年 2 月 10 日号〕 p 5) という通信に見られるように、農村問題に対する関心はまだこれからといった観がある。岩佐の「農村なくして、何うして人類が生きて行けるか」(第 7 号〔大正 10 年 3 月 20 日号]) はまだ深く考察されるに至っていない言葉であるが、以後の彼らの方向をさしめしているといえよう。

〔第 1 次『小作人』大正 11 年 2 月、1 号のみ〕アナキズム運動史上、『小作人』という雑誌は発行者を異にして第 3 次まで出ている。そのうちの第 1 次、第 2 次が本章の時期にだされたものであって、後になってアナキズム農村運動の歴史が振り返られる時、常にその嚆矢として挙げられている。

第 1 次『小作人』の発行元は埼玉県蓮田(初めは熊谷)の小作人社で、同人はのちギロチン社事件で死刑となった古田大次郎に長島新、渡辺善寿の若いアナキストである。小作人社は「当時、ようやく目がむけられ出した農民の問題を、農村に自分の体をおいて考えながら、あたらしい運動を掘りおこしたい」(古田ノート 10、p 55) と結成され、雑誌発行、演説会、座談会などを計画していたが、嚴重な尾行警戒のために結局 4 ページの『小作人』を 1 回発行したのみで解散したのであった。第 1 号の誌面は古田自身「一定の主義も色彩もなかった。アナでもボルでもなかった」(同 p 55) というように、小作人が地主に対抗して立つ必要を述べた文章と小作争議の報告などで埋められているが、見落としてはならないのが、当時日農の主張にもその片鱗が見え、またその後のアナ系の農村論に必ず登場してくる、農村と都会を対立させる議論である。自作農は農村外の金持から搾取され、小作は地主と金持から二重に搾取され、農村全体としては地主と都会から搾取されているというのである。農民は命の親である食糧を生産するのに対して都会は高価なものや unnecessary なものを生産している。必需品もあるがそれを農民に高い価格でしか売らない、と論じている。これは当時の低い農産物価格と、相対的に高い工業製品価格の差の存在を指しているのだが、この事象を資本家と小作の階級的対立としてとらえずに「都会は」「農村は」として論じているのが特徴である。一か所だけ労働者との共闘関係について触れているところでは、小作対地主、労働者対資本家の「二つの戦ひを一つに結びつけて××××」とあるが、それ以上深く突っこんで論じられてはいない。

また既に結成が決定していた日農については、創立に関わる有馬頼寧、賀川豊彦を茶化した上、「何にしても素晴らしい千両役者が揃ったものだワイ。どんな芝居が見られる事か。僕らは先ずユックリ拝見するとしやう。」といった態度。有名な人物が声をかけて組織をつくるという形の成立に対して、当時労働運動の場でアナ系組合が総同盟幹部をダラ幹として排斥したと同様の批判をもったものと考えられる。

〔第 3 次『労働運動』(大正 10 年 12 月～12 年 7 月) 15 号、第 2 次『小作人』(大正 11 年 10 月～13 年 4 月) 9 号〕

『労働運動』は第 3 次においても誌名どおり大部分の記事が労働運動に関したものであるが、いくつか農村運動論の窺える記事がある。第 3 次『労働運動』と『小作人』の関係についてここで触れておこう。第 1 次『小作人』とはメンバーの重複はないが、小作人の

若い同人が、アナキズム運動の拠点で、先輩アナキストの集まる労働運動社をしばしば訪れ、互いに顔見知りであった。第2次「小作人」では、初めの2号については一部分、第3号からは東京のメンバーのほとんどが重なっている。そこで両者をひとつにして論をたどる方が好都合であろう。

第2次『小作人』は第1次の埼玉小作人社のメンバーの一部に新しく人を加えて「農村運動同盟」を結成し、その機関紙として発行された。既に全国的な小作人団体である日農の創立を見たあとであるから、日農と対立的立場に立つならば、第1次の時のように単純に小作争議を報じ、小作人よ立て！ と論じているわけにはいかない。第2次『小作人』に至って、ようやく自らのアナキズム農民運動を考える状況となるのである。農村運動同盟は結成にあたって、「小作人運動は、ただ一筋に、小作人諸君の自主自治的精神を以て発達せねばならぬ」の方針の下に、運動の批評・紹介を行う機関誌の発行、実際の小作争議への参加を活動内容として計画した。実際にも多少の地方支部が作られたり、同人が各地にさかんに出かけて働きかけたようである。ところが第2号（大正11年12月）を発行してからほとんど廃刊状態になり、翌年4月に至って第3号から、労働運動社の和田久太郎、近藤憲二が新たに加わって、陣容一新して再出発した。途中大震災に遭い大杉栄と伊藤野枝を失った『労働運動』は廃刊されたが、『小作人』は復刊された。

第3次『労働運動』と第2次『小作人』において、小作人と地主との対立に関する運動報告や小作調停法の本質暴露記事等の内容は日農と変わるところがない。小作人運動に一般的なのであろう。ここでは特徴的な主張を拾ってみよう。

労働者農民の提携の必要性を説く一方で、都会労働者の農民に対する傲慢を指摘するバクーニンの文章の翻訳が掲載されている。第3次『労働運動』（大正11年2月）の「都会人に対する農民の不平」である。農民の都会人に対する不服、憎悪の原因は、都会が農民を支配搾取して政治制度を無理強いしてきたこと、都会の労働者=共産主義者に土地を没収されるのではないかと恐れていること、にあるとし、実際にも農村の文明に対する都会労働者文明の優越を理由にして社会主義労働者がその政治的社会的理想を強めていることを非難している。バクーニンは周知のように第一インターでマルクスに対立したアナキストであるが、彼はマルクス主義運動における将来社会の中心的担い手をプロレタリアと見做す考え方に異議を唱え、かつてブルジョアが自らの優越を理由に支配権を握ったのと同じ論法ではないかとしている。アナキズムは、近代以降常にマルクス主義に対抗する形で発展してきた経過があり、総体のみならず各論にわたっても反マルクス主義の色彩が濃い。アナキストの中でサンジカリストを除けば、マルクス主義に対する反動でいずれも労働者中心の運動論には否定的であり、敵が軽視する農村に目が向けられる結果となっている。（サンジカリズムは労働者を重視するが労働組合そのものによる革命をめざし、指導する党的存在を否定する点でマルクス主義と異なる）こうした反マルクス主義志向が、アナキズム系の農村運動論の形成に一役買っているといえよう。

加えて、アナキズム思想の支配なき搾取なき自由自主の、そしてそれ故にやや自給自足

の傾向をもった共同体への志向は、それがユートピアのものでなく現実に可能であることを証明するために、モデルとしてしばしば農村をひっぱり出したが、そのことが彼らの農村への思い入れを深くしたのであった。「都会に比して更に多く自主自治の美風に富む農村」（『小作人』第3号〔大正12年4月〕）といった言葉がしばしば出てくる。地主と都会に対する隷属が打破されれば「百姓が互に楽しく笑って暮らす幸福な農村文明」（『小作人』第2号〔大正11年12月〕）が実現すると考えられている。農村運動論に限らず、一般にアナキズムには、マルクス主義とは対照的に生産力の発展を重要視せず、却って敵視する者すらあり、工業の必要性は軽視され、工業が発達せずとも万人が幸福に食べていければよいという志向性があるように見える。そして農業は人間の命の親である食糧を生産する基本的な重要な営みであるという原則論がしばしば論じられる。そこからは農村を舞台とする理想社会像が出てきてもおかしくはない。

また文化・経済が都会に偏り、農村が衰亡していく当時の日本の現実には、マルクスの眼に労働者の生活の悲惨さが写ったように、日本の多くの人の眼に農村生活の悲惨さを写し出した。わずかの家や土地をもつ農民より「長屋に居る工場労働者の方が、吾々よりもっとよい生活をして居ます」（『小作人』第1号〔大正11年10月〕）の言葉は実感であったろう。ここから労働者でなく農民こそが最も搾取されているという話が出てくるのである。農民即最被搾取者論をとらえたのは「都会のプロレタリアは彼等の主人たる雇主や資本家の手足となりて、彼等の涼奪階級を助長し、完成する職分を為すもので、彼等から其裾分を貰って其生活を維持して居るものである」（『小作人』第2号〔大正11年12月〕）として資本家と労働者を山賊の首領と子分にたとえた岩佐作太郎のみではなかった。農民は現代社会においては最も自主自治の生活を送っている、農業は基本的根本的産業である、農民は最も搾取されているとする基本的な議論は、今後一貫して登場することになる。

当時は既にロシア革命が成功して数年を経ている。ボル派はロシア革命を錦の御旗として革命ロシアを美化し、それを手本にして我々日本も続け、と高揚していた時であった。労働運動社と農民運動同盟のロシア観はどうであったろうか。ベルクマンの「ロシア政府と農民」が大杉の訳で『労働運動』（6号、大正11年8月）と『小作人』（1号、大正11年10月）の両方に掲載されているので、それによって見よう。ベルクマンは革命後、期待を胸に祖国ロシアに帰り、情勢を詳しく視察する機会を得たアナキストである。その記事では、ロシア農民が革命政府によって自家用食糧まで強制徴発され、ときには村の成年男子全員が銃殺されていることを報告している。その後もアナ系の機関紙・誌ではしばしばロシアの農民が強制徴発されたり、農産物生産量が減っていること、外貨獲得のために徴発された穀物が輸出されていることなどが報じられた。アナキストにとってロシアの農民の状況報告は、ウクライナのマフノ運動やクロンシュタットの話と共に、「ボルシェビキが革命はどんな風にはやってはいけないかを示した」というクロポトキンの言葉を裏づける材料となり、とくに農民にとってどのような革命がなされるべきかの反面教師となったのであった。

日農は前にも触れたように、その創立にあたっては当時優勢だったアナキストの農村への進出を憂慮し、アナキストを意識して穏健着実な組合運動をと考えていた。日農本部員の仁科雄一は機関紙『土地と自由』の第3号（大正11年3月）で「恐るべきアナキストの一派は農村を挙げて一斉のその蜂起をそそのかして来た。而して農村の如上叛逆的めざめに油を注いでいる」とし、彼らの「暴力的直接行動」は農村の滅亡・焼化へ向かい、我々の組合運動は農村復活・農民文化建設へ向かう、として対比させている。これに対してアナキストの側は、まだ農村運動への進出をはじめたばかりで、農村の一斉蜂起などは無理な話であり、小作人組合の設立、連絡、連合の急務を説くにとどまっていた。ここで日農に対する批判と、『労働運動』『小作人』の考えていたあるべき小作人運動の姿を見てみよう。

アナキストにとって日農は、そのメンバーがいくら「農民自身の自発的行動」を叫ぼうと、決して小作人自らの努力によってつくられた組合と受けとることはできなかった。創立の経過が第一にアナキストの気に入るものではなかった。指導者らが小作人組合の必要が痛感されている時期に乗じて指導的勢力を植付けようと意図し、大新聞に宣伝して理事や評議員に肩書きつきの顔ぶれを並べた規則書を発行しただけで創立されたもの（『小作人』第2号〔大正11年12月〕）と考えられていた。実際に、まず日農という形を作ってから全国からの加入申込を受けて成立したことはたしかである。日農の運動方針も、当初は地主あつての小作、小作あつての地主という協調主義でアナキストの是認するものではなかった。その上日農では、労働運動の舞台でアナキストが対立し排斥を叫んでいた労働総同盟の幹部が要職につき、日農関東同盟では事務所さえ総同盟と同居していた。もとよりアナキストが参加し内部で活動しようと試みる団体ではなく、対立的に生まれたのであった。

しかし、日農は創立後3か月後の第1回全国大会頃から現場の小作人運動の実際経験によって組織や旗幟が変化していった。協調主義は体験によって不可能とされ、地主との激しい対立が反映していくのである。アナキストは毎年大会を傍聴するなどしてこうした変化を観察していた。そこで、日農に参加する小作人に向かい「小作人自身の自主自治的精神を毒する、指導者を徹底的に排斥し、真に小作人自身の切迫した階級戦から得た体験に依って、組合運動を継続して行かれん事を望む」（渡辺善寿、小作人2号、大正11年12月）と呼びかけたのであった。第2回大会（大正12年4月）の傍聴記で昨年と比べて「一段の進境」と評価したのも、運動の主導権が一部幹部から小作人の手に移ってきたことを見てとった故の言葉であろう。

日農ではやがて大正13、14年とボル派の勢力が伸びて、無産政党組織の問題、闘争に有効な中央集権的組織の問題が論じられるようになる。大正13年4月の『小作人』では和田久太郎が「日本農民組合は未知数なんだ。ボルの団体ではない。攻撃ばかりが我々の能ぢゃない」といっているが、やがて日農はマルクス主義者によって指導されるようになっていって、もはやアナキストにとって敵対団体以外の何物でもなくなってしまう。

では日農とは異なった如何なる運動が考えられていたのか。「組合運動において組織その

ものを信用せず、人間そのものを信用すべきだ」、「私共の自発的協同、自発的組伝に依頼せざるに及んで其運動は害悪その者と化す」（「小作人」2号、大正11年12月）というのが基調で、農民の自主的運動の必要性を繰り返し説いている。その奥には、人間は相互扶助を行なう社会的動物であって、その人間性は信頼するに足るから指導は無用であるという人間観があった。それゆえの小作人を踏み台にする幹部らへの批判であり、小作人らの組合への依頼心への批判であった。実際にも、組合の役員が組合員から私的利益追求、売名、名誉心のために活動していると見られているが、こうした事実は否定できない、疑惑を抱かれないよう注意せよと日農の機関誌で注意しているのが見えるし（『土地と自由』5号、大正11年5月）地方においては、日農の組合ができて組合費を納めたから地主対策はもう大丈夫といった受け取られ方をしたのもたしかであった。しかし、当初の日農の運動は、まだ農民の自発的活動を重んじようとする点、都会と農村の対立的図式によって農民の文化を建設しようとする点など、アナキストとの懸隔は決して大きくはなかった。懸隔の拡大は、日農の指導部にボル派の勢力が大きくなってからであって、労働運動との関係や組織形態等において、イデオロギーの差、ひいては人間観、人生観のちがいともいえるべき根本的差異が目立ってくる。最終的には、両者の運動は、実際運動の場では実践から生じる必要性によって似たような闘争形態であっても、思想的対立の様相は、それぞれアナキズム、マルクシズムによって理論武装された単純な対立図式になっていった。勿論アナ系の運動は農村において微弱なものであったが。

第3節 農民文芸会の発足

労働運動社や農民運動同盟とは全く無関係に、のちにアナ系の団体と見做されることとなる農民文学の団体が誕生した。農民文学史上重要な農民文芸会（当初は農民文芸研究会）である。

大正11年12月、シャルル・ルイ・フィリップ13周年忌記念講演会が東京で開かれた。『種まく人』の創始者、小牧近江が、フランスの田園作家シャルル・ルイ・フィリップの十三回忌を記念して、農民の友達、代表者たる芸術家よ出でよと呼びかけ、農民文学に関係する文学者や農村問題に関心をもつ思想家が集まったのであった。それまでは『種まく人』においても、「無産階級の文学」を目指すというとき、その無産階級は都市労働者に重きをおくものであったが、この講演会は農民文学者・批評家らを集合し、統一への契機となり、また人々に農民・農村へ目を向けさせるきっかけともなったのであった。この当時、新聞・雑誌に、郷土芸術、土の芸術に関する論文が多数掲載された。（犬田卯『日本農民文学史』参照。以下もこの書によるところが大きい）

講演会后、農民文学の集まりがもたれるようになり、震災後農民文学研究会と名づけられた（やがて農民文芸会となる）。幹事は農民を描く作家犬田卯。発足当時の会員はほかに吉江喬松、中村星湖、椎名其二、石川三四郎であったが、犬田を除くメンバーには、大きな変動がある。

関東大震災後会は再開され、メンバーは次第に増え、それぞれがさかんに論文を新聞・雑誌に発表した。各人の考え方にはそれぞれにかなり相違があり、主張を表現する名称も「大地主義」「土の芸術」「郷土芸術」「農村文学」「地方主義文学」「田園文学」等々が統一されていなかった。このころの顔ぶれを見てみよう。農村取材の小説で知られていた加藤武雄、民衆詩派の詩人で知られる白鳥省吾、ウィリアム・モリスの研究で知られる大槻憲二、のちに農民小説で有名になる和田伝、その他早大文科の出身者が多数参加した。昭和2年6月末現在の会員数は44名であった。「来る人を拒まず、去る人を追わず……のいわゆる大同団結精神」（犬田 p 47）によってボル派アナ派、その中間的なもの、利益になりそうだから入会するという便乗主義者等、種々な傾向のメンバーが集まっていたのである。彼らの主張のおよその特徴をあげれば、『文芸春秋』等の「ブルジョワ芸術」に対して批判的・敵対的であったこと、プロレタリア文学に対しては都市の文学と断じていたことである。そこで会として不統一であり、内容はまだ整理されていなかったが、アナキズム系と見做されたようである。これは会の中心的存在であった犬田卯の思想との関連で無理もないことであった。犬田自身はアナキズムを排し、我々の農民文学はアナキズムとは異なる独自のイデオロギーをもったものだとして終始一貫して主張したが、農民の自主による運動によって支配搾取のない自主自由の社会をめざす点など、まぎれもなくアナキズムのカテゴリーに入れられるべきものだった。犬田の存在が、農民文芸会を保守的な田園思慕の文学でなく進歩的左翼的傾向にあるものと認めさせることに貢献したといえよう。また当時の原始生活思慕、近代工業の排撃といった文明没落論（室伏高信ら）のひとつとも解されたが、両者の間には共通する傾向があり、必ずしも誤解とばかりはいえない。

主張の内容については、次章において第一次『農民』の発行とともに扱い、ここでは農民・農村の文学における自己主張と、文学にとどまらず社会運動への関心を含んでいたことのみを指摘しておく。

第3章 農民自治会と自連派（大正14年～昭和4年）

第1節 大正14年～昭和4年の情況

農村経済は前章の不況が一層悪化し、次章の農業恐慌の最悪期へと沈みこんでいく時期にあたる。昭和2年の金融恐慌、4年の世界恐慌へと、景気は下がる一方であった。

前の時期の農業政策がひきつづき行われていった。ひとつ目新しいのは自作農創設政策の登場である。小作争議の増加の中で、小作調停法を成立させるとともに、地主にとって土地所有の魅力が乏しくなったことを背景に、小作農が小作料とほぼ同額の年賦を支払えば自作農になれるという制度であった。「自作農ハ土地ヲ愛護スル念強ク、随テ土地ノ生産力ヲ維持培養シ、思想穩健農村ノ中堅トシテ、地方ノ繁栄ニ努ムル等、国土経営上将タ農村社会上頗ル重要ナ地位ヲ占ムル」（大正15年の自作農維持補助規則制定にあたっての前田農相の演説〔今村 p 91より〕）と意図されていた。

対地主闘争を主とする日農の活動は、無産政党設立、分裂問題がからみながらも引きつ

づき闘われている。昭和3年5月には弾圧下、戦線統一をめざして全日本農民組合同盟（大正15年に分裂していた）と合同して、全国農民組合（全農）が設立された。

一方、アナキズム運動は、大正14年に普選法が成立して以来、退潮の色が濃かった。普選による無産階級の解放の可能性が一般に期待され、アナキストがそれを排撃したのも退潮の要因であった。その中で、大正15年にはアナキスト団体の連合である黒色青年連盟（黒連）、アナキズム系労働組合の連合である全国労働組合自由連合会（全国自連）の二つの全国的組織が誕生した。両者の主要メンバーは重複している。それぞれの機関紙『黒色青年』（大正15年4月～昭和6年2月、24号）『自由連合（のち自由連合新聞）』（大正15年6月～昭和10年2月、98号）によってその主張を窺うことができる。

アナキスト、アナ系労働組合の大同団結であったはずの組織であるが、まもなく内部分裂がはじまり、2年11月の全国自連第2回大会、3年4月の第2回続行大会から対立は深刻になっていき、いくつかの組合が脱退していった。全国自連に残った方は自連派とよばれる。アナルコサンジカリズムを排撃し、労働価値説、階級闘争説、労働組合運動（労働組合員の革命運動はよいが労働組合としての運動は排す）等のマルクシズム的要素をすべて批判の対象とし、「純正アナキズム」を自称した。一方、ボル派へ流れた一部をのぞき脱退した組合は、日本労働組合自由連合協議会（自協）を結成し、4年6月に正式に発足した。自協は労働組合運動の重要性を認める者、労働組合を運動と理想社会の重要な担い手と見做すサンジカリスト等の混成部隊といえよう。雑誌『農民』による農民派も自協派と見做されることが多かった。しばしば自らを実践的アナキズムとよび、自連派から「サンジカ派」と呼ばれている。自連、自協の対立は思想運動、文芸運動のも及び、日本アナキズム界は自連派と自協派の二派にまさしく真二つに分裂対立した。この状況は8年まで続き、対立は両者の機関誌による論陣をはっての応酬にとどまらず、内ゲバにも及び、泥沼の様相を呈した。

第2節 農民派の活動と思想 一その1、農民自治会

農民自治会（農自）は大正14年末にその成立を見た。発起人は下中弥三郎、石川三四郎、中西伊之助、渋谷定輔らであり、その後多数の参加があり、異動があった。まず主な参加者を見てみよう。前にあげた4名のうち、平凡社社長の下中と著述活動を主とするアナキスト石川は、実地運動に携わるよりは講師・理論家的存在であり、実際の各地の運動については、埼玉県の小作農渋谷と、労働運動出身の作家中西、長野県出身で編集事務を受けもった竹内愛国の存在が大きかった。ほかに東京では下中の啓明会、アナキズム団体の全国自連、等からも参加があった。農自のメンバーの多く、とくに竹内は、農自はアナキズムの黒色ではなく、もちろんマルクス主義の赤色でもなく、農民自治主義の緑色の団体であると主張したが、マルクシズムの団体から、また初期にはアナキズムの団体からもアナキズムの農民運動と見做されていた。これは主張の内容から判断されただけでなく、石川三四郎や多くの全国自連のメンバーが参加していたことが理由とな

っている。

下中の起草による創立趣意書・標語は創立当時の農自の考え方をよくあらわしている。創立趣意書では、日々贅沢に赴く都会に貧苦に咽び無産農民を対比させ、その原因を「もともと都会は、農村の上まへをはねて生きてゐる。農民の汗と血の塊を横から奪って生きてゐるのである。」とし、「いつまでも他人の踏台にされてゐてはたまらない。諸君起たう、みんな手をたずさへて起たう」と呼びかけている。標語には

- 一．農民自治の精神に基き、農民生活の向上を期す。
- 一．協同扶助の精神を以て、友愛の実を挙げんことを期す。
- 一．都会文化を否定し、農村文化を高調す。

とある。このほかに農自の主張として、指導者や政党の指導によるのではなく農民の自主自治を重んずる、組織的には中央集中的形態をとらず自由連合のかたちにする、工業より農業を重んじ、都市の破壊を目指す。農村の良風美俗に自主自治の大きな可能性を見る。権力政党・議会を否定する、といった傾向が顕著であるが、前章の萌芽期でみた当時のアナキズムの主張と重複しているといえよう。

そのアナキズム団体との関係であるが、昭和2年頃にはアナ系労働組合が農自との提携を決議する等、友好的関係にあった。しかしその年のうちにアナ系の人々（ほとんどが自連派であった）は脱退し、農自に残った人々は、アナキズムの農民団体と誤解されたため官憲から圧迫を受けたのだと考えたり、アナキストは現実的で有効な策を持たずにただ否定とユートピアを語るとか、アナキズム運動は組織的な運動を無視して自由連合主義をとるなどと批判するにいたり、両者の関係は対立的になる。農村の現状を地主よりも都会による搾取が原因と考え現状打破を目指す運動にはほかにもいくつか異なった運動方向の可能性があったろうが農自が農民の自主自治を最大眼目として反体制的な運動を進める方向へ向かったことについては、アナキズムの影響があったろうと考えられる。

以上に概観した農自の主張について、機関誌『農民自治』によって細かく見ていこう。論者による議論の違いはあまりない、というより終始創立当時の綱領や標語の枠の中に納まっている観がある。まず運動の主体を小作中心とせず、農民全般と考えている。それは地主と小作人の対立以上に都会と農村の対立が重要であると考えられているからである。農民は絶対多数で食糧を握っているのだから地主までも団結して闘えとさえ呼びかけられることがある。これはひとつには、運動のさかんな長野県では自作農が多く、とくに小作問題よりも都会対農村の問題が意識されざるを得ない経済的状況にあったことが、農自全体に影響したと考えられる。地主に対する小作の団結もいわれるが、「農民自治」の名称どおり、都会に対する農村居住者の自治団結の方が重視された。都会の搾取を廃して新しくつくるべき社会は「各人が各々生活の必需品を自身で生産し消費しすべての事が相互扶助の精神に依って遂行される自治的社会」（2号、大正15年5月）とまとめられ、自給自足指向、アナキズム的相互扶助の自治共同体指向がみられる。労働者との共闘については、前にも触れたように当初は全国自連と友好関係にあった。全国自連からはそのメンバーが

農自に参加していたこともあって、提携すべき「自由連合主義に基く、農民運動」（自連7号〔大正15年2月〕）と見做されていたのである。茶話会に農自のメンバーを招いて話を聞いたり、農自北信連合発会式に祝電を打ったという記事が『自由連合』にみられる。また大正15年末に関西労働組合自由連合会第3回大会で、昭和2年春には全国印刷工連合会第4回大会と関東労働組合自由連合会第2回大会で、それぞれ農自との提携が可決された。（但し、関西自連では各地方ごとの提携）

農自の活動のうちまず教育・研究活動のみよう。農自全国連合では4回の研究会（大正15年6月～12月）での講演、4泊5日の短期講習林間講座（大正15年8月）それぞれ3日間、4日間にわたった2度の農民自治講習会（昭和2年1月、昭和3年2月）。地方連合においてもいくつもの講習会が開催された。のちに農自は組合かそれとも思想団体かが問題になったことがあるが、それほど農民に対する農民自治主義の啓蒙に重きをおかれていたといえよう。たとえば初期の研究会では

下中弥三郎：土地問題の史的発展

中西伊之助：自治と政治

下中：非政党同盟の理論と実際

石川三四郎：土の権威 が講演された。

農自が盛んな頃の第1回農民自治講習会の演題は次のとおりである。

農民自治の理論と実際：石川

工の教育：大西伍一（啓明会から農自へ）

小作組合の話：朝倉重吉（長野水平社、農自）

無産政党運動史：中西

東京では労働組合のアナキストや文筆業の者など非農民ばかりであったが、埼玉・長野を中心とする地方では事情が異なっている。その土地で現状を憂えていたり、文芸サークル等をつくって仲間が集まっていた農民（自作・小作）が主力であった。そこで実際の農民の活動が行われた。とくに県内にいくつか連合ができたほどの長野県では、農会廃止運動、桑の大霜害に対する救済措置としてモラトリアム（被害桑園の年貢・税金の金免、未払いの肥料代や電気代、借金等の支払延期）の要求運動、岡谷山一林組争議での女工と家族の支援活動、電気消費組合運動など、特色ある農民運動が闘われた。

農自は創立当初から、日農の運動とは異なった新しい運動と見做されたらしい。『東京日日新聞』は埼玉の南畑農民自治会の設立を報じて「最近の傾向であるマルキシズムの指導精神による中央集権的な運動に反し、地方分権的な農民自治主義に立脚して、新重農主義の主張のもとに、農村文化の新農会実現のために……との全人類解放を叫んで、全国的運動を開始」、「新重農自治主義に立脚するこの堅実な運動は、日本では最初のもの」（大正15年5月、渋谷p278）と評している。また同じ頃、警察の主任が「はじめはやっぱり“赤化”かと思ったが、雑誌を読むと、これまでの赤化とは全然別な、しっかりした新しい運動、しかも穏健な運動だとわかった」（渋谷p324）と話したという。

当時の普選へと並びく空気の中で、農自は選挙に対して発足以来「非政党同盟」という独自の態度をとった。下中がアメリカのノースダコタ州の農民の非政党同盟（ノンパーチザンリーグ）にならって提唱した戦術で、綱領にも四項目中の「四、非政党的自治制の実現」としてあげられている。無産政党も含めて政党を政治的野心家の奮闘の場であり自治に対立するものとして否定し、その有害無益を宣伝した。しかし選挙を無視して投票を棄権するのではなくて、要求項目を候補者に示してそれに賛同する候補書を推薦し、その後で当選者の行動を監視しようというものであった。当面の問題に関する具体的要求に限定されていたし、「代議士病患者にこの八つの要求を背負はせて議会に追ひこめ」（農自 16 号）という選挙・議会否定のニュアンスによるものではあったが、大井氏の「アナキズムと批判されていた性格をいっそう鮮明に印象づけ」た（大井 p 306）という評価とは逆に、この戦術はアナキストから「妥協的な請願運動」（小作人 11 号、昭和 2 年 12 月）「改良主義」（同）「改善団体」（昭和 3 年 1 月）「何！ 民衆に政治の駄目なことを、はっきり知らせるのだと。馬鹿な！ 大方非政党同盟は結極駄目だと云ふことを皆に証明する為にやっているんだろう」（小作人昭和 3 年 2 月）と非難されるに至ったのであった。なお非政党同盟の活動がさかんになったのは、アナキストが手を引いたあとである。

農自の内部では早くから、下中、石川らの東京在住のインテリに対して、渋谷、竹内らの農民の側から「立場に本質的な違いがある」、「クラブ的な態度」（渋谷 p 338-9）「観念的な理論が少し多すぎる」（p 361）といったくいちがいが意識されていた。そのインテリたちは、諮問部を設ける話が出たときに「諮問部などという顧問臭い部門」は自主自治の運動の精神に反するといって反対する人々ではあったが（p 357）やはり理念先行傾向の彼らと、農民の現実問題を生きるメンバーとの間のずれは消しようがなかった。日農との関係について、渋谷が日農に不満を感じるのは自主自治の精神が弱くて上から指導される傾向にあることと、小作料の運動ばかりしていることに対してであって、農民の解放運動のために共同戦線を張るべきだとしたのに対して、彼らが日農はボルシェビキの指導精神が支配的勢力をもっているから対立すべきだと主張したり、東京在住者のひとりである大西伍一が農自は農民教育運動が中心だから理想実現には 4 年もかかるだろうとかまえていたりするので、渋谷が消耗したというエピソードもあった。（渋谷 p 378-9）実際に農村をまわって組織活動をしたのは渋谷や竹内らであり、農自の運動はそれによって現実の盛り上がりを見せていった。それにつれて、農自の当初の綱領・標語に見える理念とはやや異なる現実的な指向性が次第に強くなっていった。3 年になると市町村会選挙への立候補、極端な自由連合主義的組織への反省等が出てくる。まもなく、ついに渋谷・中西は脱退し、地方の連合でも方針転換が行われ、全農や無産政党に加わるもの、運動から手を引く者が続出した。これに対して自連派からは「二、三幹部の売名的行為が、地方単位会をして官憲の圧迫を招くに至らしめた」こと、「農民の利害に無関心」で「一つのプチブル的文化運動の傾向にあった」ことが不振の原因とし、最近殊更に「反動的色彩の濃度を増せる感がある」「日和見主義的団体」などと冷たく指摘している。（自連 25 号〔昭和 3 年 7 月〕 27 号〔昭

和3年10月))

大井隆男氏は農自の農民自治主義は次の3つを基本とするとしている。「国家主義ないし皇道派的運動における思想のひとつ、あるいは天皇制を深部から支え維持した一つの思想などを規定されるものとは異質な、反国家的、自由主義的思想」である「農本主義」と、「黒色テロリズムのそれではなく、……すべての権力や強権=資本主義・マルキシズム・政党・国家権力等々を否定し、排除する意味における無政府主義」と、「キリスト教に淵源するヒューマニズム」(大井 p 428) である。そしてその社会像は「生命の原点に立ち、権力・支配・搾取なき、生産(労働)社会であり、そこにおいては人は初めて全人として自主・自由・平等・自治の全的生活が可能になるとする」とまとめている。そうした理念はとくに創立当初には色濃く、3年半ばに事実上自然消滅するに至るまでも一貫して抱かれたものであった。ところが、この理念によって現実に立ち向かうところから諸問題が起こってくる。創立発起人の下中と石川は理念の定着に大きな役割を果たしたといえようが、2年段階でそれぞれの仕事が忙しく会から離れてしまっていた。渋谷・中西ら農村の活動家たちは、その現実主義指向が現実の活動の中で更に強められ、農自の理念を現実の重みが超えた形で、すなわち解決をせまられる目の状況に対して理念と結びついた有効な手だてが見つけられないで運動から離脱していった。農自の理念は、農村での実際運動を失った形で、第4節に述べる第2次『農民』へとつながっていくのである。

第3節 農民派の活動と思想——その2. 第1次『農民』

第2章では農民文芸会の発足について述べたが、本章では農民文芸会の活動を見ていこう。大正15年、『早稲田文学』8月号の「土の文学号」や『農民文芸十六講』、『農民小説集』、『農民文芸叢書』等、いくつかの出版物が、農民文芸会会員の執筆によって出版された。昭和2年には、農民文芸講演会開催、会員の加藤武雄が主筆をしている『文章倶楽部』での「農民文芸号」の特集、農自主催の農民文芸講演会で講演等々、下準備を整えた上で、10月に月刊『農民』が発刊された。3年6月の9号まで続いた。5号までは犬田卯の編集、6号からは鎌田研一の編集によるものである。発刊の事情は、犬田によれば、諸分子混成であった「日本プロレタリア文芸連盟」が第2回大会(大正15年11月)でマルクス主義の芸術団体として改組され「日本プロレタリア芸術連盟(プロ芸)」と改称し、『文芸戦線』を更新したことに刺激され、われわれも機関誌をもとうという機運が強くなったことによるという。ちなみに改組によって排除されたアナ系の人々は『文芸解放』『解放』『悪い仲間』などに拠って作品を発表するようになったが、それらの雑誌と第1次『農民』の間には人的つながりはない。

『農民』の「創刊の辞」を、発行資金の大部分を負担した加藤武雄が次のように書いている。「農民文芸の研究及び制作を以て、新時代の文化を是正し促進しようとする私達」は「最も直接に天地の化育に参ずるところの農民の精神、換言すれば生産主義的意識を以て、私達の現在及び将来の社会生活の基調としやうとする」、「当分は文学芸術を通して」運動

するが「やがて、政治経済の方面にまで進出する機会を得るであろう」（犬田 p 50）この論調が以後各号の主張の公約数といってよい。しかし、その「門戸解放」「大同団結」「一種の自由連合」（創刊の辞）を組織方針とする農民文芸会は、内部的な対立が起こらずにはすまなかった。

まず3年になると、ロシア革命を礼讃する原稿の扱いをめぐる対立が起きた。もともと農民文芸会では編集の犬田の役割が大きく、彼の個性の強さも手伝って、犬田と多数を占める早大出身者の間に溝があったところへ、この原稿が現われたのであった。大同団結なのだから掲載せよと主張する者たちと『農民』には『農民』の立場があるから掲載できないとする犬田の間の対立は、雑誌の存続をもあやうくするものであったが、結局雑誌存続のために犬田が手を引くことになり、原稿は掲載された。これが帆足図南次の「パン・パン・パン」（6号、昭和3年3月）である。この事件についてはのちに鎌田（早大出身者ではない）が「犬田卯氏が第一次『農民』から手を引いたのは、一気に雑誌を反マルクシズムの戦闘雑誌にしてしまはうとする意図が強すぎたからだったと思ふ」（第2次『農民』1号〔昭和3年8月〕「農民再刊の理由」）と述べている。農民文芸会は大同団結の雑多混雑の集まりだとはいうものの、その色彩は会の中心的存在である犬田と、編集を交替した鎌田による反マルクシズム、反ブルジョア文芸のアナキズム的農民自治主義が代表していた。参加者の中には、文壇に進出するための足場として『農民』を利用しようとする者がいたし、当時隆盛を築きつつあったマルクス主義の文芸運動へと移っていく者も何名かいた。内部ではイデオロギー的対立のみならず、個人的感情的な争いもあったようである。こうして発刊1年足らずで売行き減少も手伝って廃刊となり、後述するように農民自治会と合流することになった。（犬田、鎌田の主張は第4章で論じることとし、ここでは反マルクシズム、農業に対する他産業と異なる優位的な特殊視、農本的社会の建設を旨とするといった特徴のみをあげるにとどめる）

農民文芸会からしだいに離れていったプロ派（プロレタリア文学派、マルクス主義派）をのぞく主要な会員、犬田、鎌田、大槻憲二、延原政行、竹内愛国、小山啓吾、桑島政寿らは、同時に農自の全国連合委員でもあった。農民文芸講演会が農自の主催で開かれたり、農自の農民自治講習会に犬田や大槻らが講演するなど、農民文芸会と農自の人的つながりは密接である。3年5月の農自の陣容一新の際に部門が確立され、婦人部などとともに文芸部がつくられた。その常任幹事は犬田、大槻、桑島、延原である。両者は実質的に同じものとなっていたのである。こうして発行継続が不可能となった『農民』は農自文芸部の機関誌として第2次の『農民』となるが、担い手に大きな変化はない。この付録に農自発行の『農民自治』がつけられた。（のちの第3次においても農民自治会発行のリーフレット『農民自治』が付録でつけられたが、第3次の時期は既に「農民自治会」の実体は全くない）

第4節 農民派の活動と思想 ——その3. 第2次『農民』

農民文芸会発行の第1次『農民』から農自文芸部の第2次『農民』への変化は、小さいが、メンバーと方針にみられる。

編集部は16名、そこに小川未明、吉江喬松、石川三四郎の支援をえることになっていた。編集部の16名は、1名を除きいずれも農自か農民文芸会、多くはその両方に関係した者たちである。(中西伊之助、犬田卯、大槻憲二、和田伝、佐左木俊郎、佐伯郁郎、大沢雅休、渋谷栄一、高群逸枝、小山啓、竹内愛国、瀬川知一良、延原政行、牧輝夫、鏝田研一と加藤一夫)

新たな参加者は加藤一夫である。加藤一夫は春秋社の創立者、トルストイやカーペンターの翻訳、評論、小説などを執筆してきた人で、大正9年にはアナキズムの団体、自由人連盟を設立し、日本社会主義同盟の発起人にもなっていた。大正14年から昭和2年まで、個人雑誌『原始』を発行し、重農主義的傾向を見せていた第2次『農民』中の有力な論客のひとりである。

さて第2次では第1次と比べて、プロ派が去って、加藤一夫、農自の活動家が加わり活気が出てきた。また主張のばらつきや曖昧さがなくなっている。第2次はまず農民文芸がプロ文芸(プロレタリア文芸)と対立することを明らかにし、第1次では思想団体、研究団体で書齋的傾向が濃厚だったが、第2次は行動団体が全国的に存在し、「無産農民を主体とした社会運動、被抑圧農民解放運動の一翼となった」と鏝田が記している(1号〔昭和3年8月〕「農民再刊の理由」)。この明確になった第2次『農民』の主張の特徴は、マルクシズムの労働者の解放運動を主体とする労働論と対照的に、農民にこそ特殊性、優位性を見、都市プロレタリアも農民のイデオロギーによるべきであるとする事である。農民の特殊性とは農業が自然との共働で重要で基本的な生産を行っていること、自然を労働対象としてのみでなく文化・思想の根源というべき絶対的な精神的対象として考え、その自然に日々関わっていることである。農村と都会を対立させ、農村居住者は大地主をのぞいて一団としてとらえられていることが多い。

第2次『農民』はわずか2号で廃刊になった。第2号発行直後に、第2節でのべた中西と渋谷定輔の方向転換と日本大衆党への入党があったからであった。中西が編集部16人の中にはいていただけでなく、二人の転換が農自全体の混乱と分解を表す一つの事件であったから、農自はここに解消同然となって『農民』の廃刊となったのであった。

第5節 自連派の農村運動論

アナキズム陣営が自連派と自協派の内部争いによって分裂していった時期の自連派の主張を見よう。

まず、昭和2年頃に最盛期を迎えた農自に対する態度であるが、前述したように昭和2年頃までは好意的であった。友好団体として提携を考えていた。農自内にアナキストが参加していたという事情のみならず、その反マルクシズムの自主自治の運動方針を見てアナキズムの農民運動と受けとったのであった。「過去、総ゆる苦難の中を隠忍して農村への運

動を続けて来た農民自治会も愈々、全国的結成の気運と共に、自由連合の旗色を鮮名（ママ）にして、猛運動を進める事になった」（黒色青年8号〔昭和2年4月〕）と祝福していた。が、まもなく「我等の同志ではない」（13号〔昭和2年10月〕）と変わっていく。その否定の言葉には次のような残念と思う気持ちが伴っていた。「我等は農民自治会を愛惜する。愛惜するが故に独裁幹部を悪むことが愈々切なのだ」（14号〔昭和2年11月〕）とか農自の完全解体に対する「農自戦線の進展に好意を尊敬を持って注視して来たが、その農民自治主義は今や全く失敗したかに見える。観念的な対都会的運動と、非政党的政治運動との過誤の上に——」（自連30号〔昭和3年12月〕）の言葉が、期待していた味方に裏切られた無念さを表わしている。では彼らは農自の失敗をどのように分析し、教訓としたのか、それを見れば、自連派アナキストと農自との相違点が明らかにされよう。

農自の幹部（とくに中西がその「独裁」を批難されている）の言動については個人的批判であるから別にして、もっとも指摘されているのは「改良主義的妥協的」（自連25号〔昭和3年7月〕）なあいまいな思想態度である。「政治は否定するが、村会議員の程度ならば肯定すると言ひ、現行市町村自治制をその俣未来社会に持ち越さうと企むなど、理論の混濁と認識の浅薄」（黒色青年14号〔昭和2年11月〕）「現在の境遇を改善することが大衆運動の最も優れたる戦法であると考へてゐる」（13号〔昭和2年10月〕）などと評されている。それではどうしたらよいというのか。農民自治の「自治」の精神、即ちアナキズム（小作人昭和2年12月）に徹せよというのである。当時自連では、対立する相手の自協派では労働組合主義を基礎として労働者の階級的利害によって階級闘争を行なうといっているが、それは結局自らの利害のための問いであつて、利益のためには妥協も辞さない改良主義におちいる、として批判していた。また労働組合と資本家の闘いは山賊の分け前争いであるという論理が大きな影響力を持っていた。アナキズムという一部の利害によらない人類普遍の思想によって革命運動をするべし、というのであつた。そして労働組合の賃上げ等、日常闘争を否定若しくは軽視し、アナキズムの理念を深めることが重視されていたそうした思想状況を背景に、農村運動においても「吾々は農村の全き解放を期する前に、先づアナキズムの本質を徹底さすことに努力しなければならぬ」、目前の利益にとらわれず「確固たるアナキズムの理論とその戦術に就て、常に研究すべき」（黒色青年13号〔昭和2年10月〕）という農自に対する注文が出てきたのである。

このような極端な思想的潔癖性の裏には、農村、農民への楽天的信頼があつた。前章にひきつづき「農民の本質的生活状態」の自主的自治的傾向に対する思い入れである。農村に対する楽観があるからこそ、手段を云々する必要を感じなかつたともいえよう。農村、とくに僻村ほどアナキズムの原理が輝いている、「美しき相互扶助の精神、自主自治的精神」（「小作人」昭和2年8月）がみなぎっている、とされていた。農民は無智ではなく、自然と実際について博学・万能で「真の人間運動をやる代表的素質の人格を備へてゐる」（小作人昭和3年7月）「美しい純真なる人情」（「小作人」昭和3年7月）が濃厚である等と農民の特質を讃美する文章もいくつかみられる。現在では悪制度のためにおおいかくされては

いるが、人間の本性は相互扶助にあって、支配や権力がなければ人々には能力に応じて働き必要に応じて受け取る自由の社会を組織することができる、というのがアナキズム思想の基本といえようが、農村では都会ほど資本主義に毒されずに本性による「美風」が残っているというのである。そこで運動の方向としては新しく農民の間に理論をふきこむ必要はないことになる。農民の間には立派に団結して自治を行なう力、自ら社会を改める力がそなわっているとされるからである。なすべきは農民自身の中にあるそうした精神を覚醒し、点火することである。

その一方の都会は破壊されるべき対象であった。都会は支配と搾取のために存在するもので、都会がさかえるほど農村は疲弊する。都市労働者に対しても見方はきびしい。都会の居住者は「農民の必要な品物を作って居る人は極めて少ないので、大概の人は無くても差支のない様な物を作って居るか、何一つ生産しないで食って贅沢をしてゐる穀つぶし」（「小作人」昭和2年5月）である。論者が労働者であっても、やはり都市への反逆と都市の破壊の大合唱である。そこでは労働者の闘いは、資本家の存在をなくす為に闘うと同時に、都会をなくすために闘われねばならない。自連派によって提唱される農民と労働者の自由連合や都市と農村の協力とは主にこうした農村における建設的運動と都市における労働者の破壊的自己否定的運動の協同なのである。都市の労働者の仕事のうち万人の必需品以外の生産は、今の世の中だからこそ有用とされているのであって、自分の職業を自ら破壊すべく運動せよというのである。そこで労農の自由連合運動は、当然農の労に対する優位を帰結する。「都会運動は農村運動に付随する関係」「都市自由連合運動は一つの別動隊」（「小作人」昭和3年7月）という言葉が、多くの論者の議論に見られる。

実際のアナキズム運動は都市においてさかんであったが「アナキズムは本質的に、その理想において、実演においてより農村に矛を向く可きである」（「自連」昭和4年2月）「社会革命は農村革命であらねばならない」（「小作人」昭和3年2月）といわれたのであった。農民の特性は中央集権を斥けるアナキズム的性格であり、生存の第一条件である食糧を生産しているから、農村の連合によって経済的に解放された自治的自活的新社会の現出が可能である、などと農村の特別の地位が想定された。ロシア革命において踏みじられた農村の実情も教訓となっているのであろう。

しかしながら、彼らの農村における実際運動は、都市にもましておそまつなものであった。大正15年の望月桂らによる埼玉小作人組合の演説会、小作争議、昭和2年には農自との提携、昭和3年には常磐一般労働組合が座談会、ビラまき等の農村宣伝活動をし、それとの関係で筑北農民組合が生まれ、ほかに、同じく自由連合主義（アナキズム）の南予自主農民組合が生まれたことが『自由連合新聞』に見える程度である。農村に注目はしても運動は「農村に向かひつつある」だけで終わっている観がある。それ故に農自が実際運動の中で現実の重みと理念の間のギャップを感じたような目には会わずにすんだともいえるだろう。

以上の自連派の主張と農民派のそれとを比べるならば、共に農村を都会よりも本質的に

優位に立つものと考えている点では共通しているが、農村のどこに特徴を見い出しているかという点については、ややニュアンスを異にしているようである。自連派では主に農民の精神、農村における相互扶助といった、いわば人間や社会にその魅力をみているのに対して、農民では農業生産の他産業との相異と、農民が生産手段としかつその中で生きる“自然”の絶対性といった、いわば人間と自然との関係に重点があると思われる。

本節においてアナキストの論議を自連派のみに限り自協派については触れなかった。その理由は自協の正式成立が次章の時期（昭和4年）であったことではない。自協派は前述したように自連派と理論的対立のみならず感情的対立をしていた雑多なメンバーを含んでいる。自連派の仲間でないアナキストは、みな自協派とされていたといってもよい。その中のサンジカリストたちの農村運動論は、当時労働運動に多忙であったこともあってほとんど見られないし、自連派から「サンジカ派（自協派）」と罵られた人々で農村に強い関心を持っていた者（石川三四郎、鎌田研一、延島英一ら）は、農民派に賛同・協力していたと考えられるので取り上げなかったのである。自連派についての機関紙の紙面の大部分は労働運動にあてられていたが、農村運動の必要を強く意識している点については、自協派のサンジカリストとは大きなちがいがあ

第4章 農民派の全盛期（昭和4年～6年）

第1節 情勢

本論文の扱う時代では、終始農村が不況におおわれているが、本章と次章の時代は中でもきびしい時代であった。周知の昭和5年にはじまる農業恐慌である。世界大恐慌の只中の金解禁は、長期にわたってつづいていた不況を劇的に悪化させ、アメリカを輸出先としていた繭は価格が暴落し、米も米価低落の中での5年の大豊作でさらに劇的に低下した。他の農産物も不況による購買力減退の影響等が原因で一層低落した。失業者が増える中で出稼ぎに行くどころか、帰村する失業労働者を受け入れねばならない。とくに東北地方では娘を売らざるをえない農家が続出する時代であった。

こうした事態に加えて、7年には農村の困窮を背景のひとつとする5・15事件が起こり、農村問題は一挙に緊急の時局問題として世間からは注視されるようになるが、これについては次章で述べる。

アナキズム運動は退潮ますますおおいがたい。6年初めには自連派最後の大争議である芝浦争議の敗北が決定的となる。もはや各地からの景気のよい運動報告はとだえ、運動を根本的に考え直さねばならないと考える者が増える時期である。

農民組合の運動では全農が無産政党の離合集散に伴って幹部間に抗争が絶えず、結局6年に合法主義指向や右傾化に反対する全農全国会議派（全農刷新派有志団から全農戦闘化協議会へ、再び全国会議へ）と右派の総本部派に分裂した。次章で全国会議派について触れよう。

さて章題を農民派の全盛期としたように、4年から6年は『農民』誌にもっとも活気の

あった時代であった。そのひとつの要因は、5年11月のウクライナのハリコフ市における国際革命文学局第2回拡大総会日本委員会、通称ハリコフ会議がひきおこしたものであった。会議では日本プロレタリア作家同盟（ナップの一部門）に対して、大きな農民層をもつ日本では農民文学に目を向けることが必要であるとする提案がなされた。それを受けて作家同盟内に「農民文学研究会」が作られ、農民文学論がさかんに発表されるようになった。こうして農民文学とプロレタリア文学の関係を主なテーマにして農民派とナップの間に論争が展開され、一般の新聞雑誌にも注目されるに至ったのであった。（次節で再説する）

第2節 農民派の動き

4年1月、全国農民芸術連盟（連盟）が結成され、4月号より第3次『農民』が発行された。（7年1月まで）

農自文芸部発行の第2次『農民』が2号で廃刊となって数カ月間に大槻憲二と和田伝が離れて、ほぼ理論的な一致を見る者だけが残ったのであった。犬田の言葉によれば「大体においてわれわれの主張するところは足並みが揃っていた」。しかし次第に「その細部が問題化しつつあった」（犬田 p 97）のがこの時期の動向である。主な論者は編集の鍵田（5年10月まで）と犬田（5年11月から）のほか加藤一夫、松原一夫、延原大川、延島英一らである。理論的にまとまってきたことを反映してしばしば特集号を企画している。その名称を見ることによって雑誌の目ざす方向が察せられる。1-2号（昭和4年5月）「プロレタリア文芸批判号」、1-4号（昭和4年7月）「ブルジョア芸術討伐号」、1-5号（昭和4年8月）「自己清算号」、1-7号（昭和4年10月）「都会への叛逆号」、ナップとの論争期には3-6号（昭和6年6月）「ナップ派農民文学撲滅号」が出た。おおよそ反ブルジョア、反プロレタリア、反都会、そして反体制的・戦闘的な傾向が窺われる。農民芸術運動のみでなく農民運動の記事もあり、また「農民自治会全国連合」発行の「リーフレット農民自治」が付録としてつけられていた。

雑誌発行にとどまらず、連盟の出版部を設けて単行本を出版し、講演会の開催もなされた。5年1月、3日間にわたる「農民文芸講演会」が雑誌『大地に立つ』との共催で、加藤一夫の住む神奈川県新治村で開かれた。『大地に立つ』は加藤が4年10月からはじめた雑誌で主に加藤が執筆していた。5月には『婦人戦線』との共催で講演会が東京でもたれた。定員400人の読売講堂が定刻までに満員となり、6時から11時まで20名以上の人々が次々と演壇に立ち、しばしば臨監の「中止！」が出る中で、途中特別出演の新内をはさんで講談や詩の朗読を続けた。こうした盛り上がりは農民派の長い運動史の中の圧巻であったろう。ちなみに『婦人戦線』はアナーキズムの婦人団体「無産婦人芸術連盟」の機関誌で、高群逸枝の編集で5年3月から6年6月まで発行された。毎月組まれた特集の中には「都会否定号」もある。『婦人戦線』の住井すゑは犬田と、松本正枝は延島と、鍵田貞子は鍵田研一と夫婦であり、『婦人戦線』と『農民』の人的関係は密接で、その主張も類似するところが大きい。

5年10月になると『解放戦線』が創刊された。『婦人戦線』と『農民』の在京同志によって、都会否定を旗じるしとする新雑誌（農民昭和5年8月）と紹介されている。同志の延島が中心であった。一時は第3次『農民』『大地に立つ』『婦人戦線』『解放戦線』と4つの友好関係にある雑誌が発行されていたことになる。

第3次『農民』は店売せず郵送による購読状態で少しずつ発行部数が増え、5名以上の会員がいる村につくられる支部も50～60に上ったといわれる。6年3月からは解放社の発売となって店頭にも並べられることになった。

実際の運動はどうであったか。5年6月号の「農民自治会とは？」に連盟と同じ住所にあって既に実体のない「農自全国連合」の「現在の事業として……毎月リーフレット、パンフレット（農民自治叢書）を発行したり、地方へ宣伝に出掛けたりしてゐます」とある。リーフレット『農民自治』は『農民』の二倍以上の部数を印刷して大部分は無料で配布しているので、少なくとも実費だけの負担をしてほしいという趣旨である。『農民自治』は地方で掲示されるなど宣伝に用いられたらしい。『農民』に見る地方からの「戦線の中から」といった報告でも実際活動で見べきものはほとんどなく、4年末からは実際運動をいかにすべきかという「戦略・戦術」問題が論じられるようになるが、やはり実践行動より議論が中心であることに変わりはない。『農民自治』は借金が原因で5年10月号、11月号を休刊したのに、11月号に「自治会（農民自治会——三原）は、協議の結果、今から全国農民芸術連盟と合体して運動することになった。もともと自治会と芸術連盟は運動形態としては一つのもの二つの現れに過ぎなかったのだ。合体するのはすでに遅過ぎた位なのだ」（昭和5年11月、p20）として、廃刊になった。以下農民派については、もっぱら主張・理論を探っていききたい。

ナップ派との論戦は6年6月から7年にわたった。農民派は鍵田と延島が後述するように去った後で、犬田が中心となってナップに反論した。この論争について犬田は、ナップ派の論文が多数、新聞に掲載されたのに対し、「われわれは一々反駁を試みたが、しかしジャーナリズムというものの性質が災いして、わずかに左の数篇が発表されたに止った」（犬田p126）とし、またナップ派の農民派農民文学論に対する批判について、「われわれのここ十年來の研究——農民観——……についても、ほとんど知るところがな」いま「わざと（であろう）曲解し……『彼等のいふ農民イデオロギーとは実は富農的イデオロギーであったのである』とまでねじまげてしまっている」（犬田p128）と憤慨している。論争は、文学上の問題として「農民文学とは何か」を論ずるよりも、イデオロギーの問題として、解放はいかになされるべきかで論じられ、また自派の宣伝のための議論がなされた観があったから、とくに勢力の上で優位に立ったナップ派が、敵の理論を「反動的地主・富農の文学」と曲解したことはフェアではないが当然ともいえよう。そのナップ派の農民文学論であるが、必ずしも理論的一致をみなかった。初めのうちは、農民文学はプロレタリア文学の一分野で農民を扱ったものと規定されていたが、のちにプロレタリア文学と農民文学は別のもので、プロレタリアートの同盟軍としての貧農大衆の文学が農民文学であるとさ

れるようになった。いずれにせよ、革命におけるプロレタリアートの農民に対する優位性が前提となっている。一方の犬田らは農民を第一とし農民そのもののイデオロギーによる運動と文学を唱え「都市プロレタリアートは、否我々の全社会は、農民イデオロギーによらなければ、絶対に解放され得ない！」（東京朝日昭和6年6月2日、犬田「農民主義の立場より」）と叫ぶ。ナップ派から見れば「これはもう、『理論』といえるものではなかったのである」（山田清三郎 1976年 p 171）ということになる。形は文学論争でも、実は政治論・革命論であり、しかも論議が整理・深化されることのない不毛の水掛け論に終わった。

『農民』の主張を見る前に、5-6年に農民派が分裂していったことに触れる方が都合であろう。農民派内には理論的不一致が存在し、そこに私情による対立も加わっていた。まず5年8月、鎌田と延島の間には原生産と加工生産をめぐる論議があり、それを契機に二名は連盟から退いた。鎌田は長く農民経済学の理論構築につとめていたが、そこでは農業は原生産で工業は加工生産であるとしていた（後で再述）。それに対して延島は、生産には原生産も加工生産もなく、等しく自然に対する加工だと主張した。この理論的対立に「多少感情上の問題」（犬田 p 114）が加わって、暴力沙汰があつたらしい。そこでしばらく二人に身を引いてもらおうということになった。こうして編集は鎌田から犬田の手にわたり、解放社発売による書店店頭への進出も犬田が事務・編集を担っている間になされたのであった。

次に犬田が、『農民』内で優勢なアナキストの中で孤立していく。農民派は農民自治会以来緑色の農民自治主義をかかげるものであったが、アナキズムの黒色とのちがいが曖昧なままで、明らかにアナキストと自覚する人間が多勢加わっていた。アナキストは農民自治主義即アナキズムと考え、犬田は農民自治主義はアナキズムを越えたものでアナキズムではないと考えていた。時間が経つにつれて犬田の農民自治主義と、多数派の思想であるアナキズムとの関係が問題になっていった。6年10月についてアナキストによる病床の犬田の除名があつて、犬田除名後の「農民自治文化連盟」（犬田除名以前に「全国農民芸術連盟」より改称された）は旗色をアナキズムと決定し、やがて団体名も「農民自治文化連盟」から「アナキスト芸術連盟」へまたまた「自治連盟」に、誌名を『農民』から『戦野』へ、再び『農民』へと変更を重ねた。また鎌田らは6年10月にアナキズムを明確に掲げた第4次『農民』を創刊した。犬田は日本村治派同盟、農本連盟に参加していく。こうして農民派は分裂していったのであった。

以上のように少人数のメンバーが互いに批難し合い分裂し、農民派は決して一丸となったものではなく、個人感情の問題も関係して農民派の理論と運動を明らかにするのは甚だややこしい作業である。以下では主要な論者の主張を、それぞれ昭和4-6年に限定せずに見ていくこととしたい。

a) 犬田卯

農民文芸会発足以前から農民文学を論じ、農民派の旗頭であった人である。茨城県の農家に生れ独学で文筆生活にはいったという経歴が関係しているのであろうか、農村に絶望

して農民文学を志した自らの体験を基礎として、従来の文学やマルクス主義文学論に対抗して形成された彼の農民自治主義は、使命感を伴ったかたくなほどの強さをもって一貫して主張された。その頑固さ、主張の個性が、農民派の中でしばしば孤立をまねいたともいえよう。しかし彼の存在は、「当時の農民文芸研究会・農民文学会の運動は犬田卯に代表されていた」（南雲道雄 p 140）とされ「犬田卯を中心とする全国農民芸術連盟」（p 156）といわれる言葉に適ったものであった。

犬田は、マルクス主義に反対したが、同時にアナキズムをも否定し、農民自治主義（緑色）とアナキズム（黒色）の相異を何度もくり返した。当時一般に農民派はアナキズム系と見做され、農民自治主義即アナキズムと考えるメンバーが多かったから、犬田は一層アナキズム批判に熱を入れたのである。それでは犬田は「アナキズム」をどのようなものと考えていたのか、農民自治主義とアナキズムの関係を説明するためには、このことを明らかにする必要がある。

アナキズムとよばれる社会思想は、境界が明確でなく、見方によっては著しく広範囲の人々を含むものである。人間の本質を相互扶助的なものと見做し、自由自主の理想的社会に権力は不必要とし、そこに至るために議会や支配による手段をとらないというのが近代アナキズムの最大公約数であろうか。しかし個々のアナキズムの考え方をみると、人間観、現実把握、理想社会像の各所にわたり、とくに運動方法については、国、地方、その人のおかれた状況によって、実に多様なバリエーションがある。犬田のアナキズムに対するイメージは、大正から昭和にかけてのアナキズム運動の現実に規定された否定的なものであったとみられる。農民自治主義は「アナキズムの一個の現実的な、時代的な発展形態」（p 137）であるとしても、決して農民自治主義即アナキズムと、同じ語で表わされてはならないものであった。犬田にとってアナキズムは、自由・平等・相互扶助等の「観念」「概念」しか持たないもので、階級的基礎・経済的基礎・現実的な実践運動の基礎は漠然としており、方法といえばテロリズムか思想宣伝しかないものであった。破壊を主として建設を軽視するとも考えていた。また「世間的に……放縦無秩序、自墮落と解され」ていることを誤解だとしていきどおるのではなく、それ故に思想の大衆化、普遍化に「甚だ不利」な名称であるとも考えた。（犬田 p 135-138「農民イデオロギー覚え書」昭和6年12月と「農本社会」1号〔昭和7年2月〕の「社会運動としてのマルクス主義、アナキズム及び農民自治主義」）これを見ても、犬田の頭にアナナルコサンジカリズムからテロリズムの時代へ、黒連の銀座事件を経て実際運動の微弱と思想偏重の時代へと移った日本アナキズムの歴史が否定的イメージを植え付けたことがわかる。アナキズムを越えて発展したものが農民自治主義であるなら、名称もアナキズムとは全く別にし、「腐ったドブへ足を突込んで抜けないうようなアナキズムなるものと訣別し、……新しい文化的、实际的の運動理論を建設するといふ意気込みをもって、更に我々の主義主張を完成すべき」（犬田 p 137）というのが犬田の持論であった。

では、観念しかないアナキズムから発展した農民自治主義とはどのようなものであろう

か。犬田の農民自治主義を現実把握、理想社会像、その実現のための運動の順に、これまでに登場した諸論議を念頭におきつつ、探っていこう。

〔農民観〕

犬田は 20 才代の初めまで農村に農家の長男として生活した人間で、上京理由のひとつは農民の因襲的伝統的空気の中にいたたまれなくなったことであった。であるから、現実の農民・農村そのものに新社会をつくる力や相互扶助のうるわしい精神を見るということはない。田園は都市にもまして忌はしいところであり「因襲観念の重苦しい、息づまるやうな泥溝」「古い槽の堆積である農村道徳観念の泥」（犬田「土の生活Ⅰ」 p 23 [大正 11 年 11 月]) といった表現がよく使われている。しかし、その泥溝の農村に「新しく土に生れた魂」つまり泥を自覚し階級意識に目覚めた青年が誕生する。新しい魂の見本は犬田自身であるらしい。大多数の古い農民は「土」に因われ眠ったり「土」を離れてしまっているのに対し、新しい農民は「土の意識」とよばれる「土から生れたままの正しい精神」（犬田「土の生活Ⅰ」 p 64 [大正 13 年 9 月])「何ものにもよらない、唯我独尊、自主自由なる大地の意識」（犬田「土の生活Ⅰ」 p 94 [大正 15 年 5 月]) のちに農民自治主義とか農民イデオロギーとよばれる精神をもっているとされている。犬田が農民のイデオロギーというとき、その「農民」は、上記の新しい農民のことである。ここに「土」という語が何度も登場したように、当初の犬田の論には「土」に対する思い入れが濃い。大正の末頃には「土の芸術」の名称を「農民文芸」「農民文学」と改め、論の内容も次第次第に観念的傾向を脱し、整理されていったが、やはり農民に対する「悠然とした白雲のやうな精神をもつところの大生活」のイメージと、それと対照的な「資本制生産のためにせつこましくされてしまひ、こせつくことしか何も知らないやうな」プロレタリアのイメージ（犬田「土の生活Ⅲ」 p 34）は犬田において一貫している。土を耕すという大自然との相互交渉による勤労は、大自然に対する謙虚さ等の独特の思想感情を生み出すというのである。では農民一般は、なぜ「利己的であり、個人主義的であり、孤立的・独善的観念の持ち主であるか」（犬田 p 138）といえ、悪い社会制度、悪い支配政治のため、つまり環境が原因である。本質的には、農業の特色である人間と自然との交渉と人間同士の共働作業がもたらす社会的自治意識をもっているという。ここに到り、犬田の農民観は、現実の農民一般でなく「新しく土に生れた力」という限定つきではあるが、本質的に農民を自治社会の良き担い手とする点で、前に述べたアナキスト自連派と同様、農民に特殊性・優位性を認めていることになる。その理由づけにおいて、自連派に比べ、やや農民の社会的関係（農村での相互扶助）より農民の自然的関係（自然との交渉）に重きがおかれているが。

〔農村と都会〕

農村問題を解釈する時、犬田もやはり農民の窮乏を地主と小作の対立という「部分的皮相の問題」で見ず、都市対農村、消費対生産の「根元基本の問題」（犬田、土Ⅲ p 65）によって見るべきだという。都市は産業主義、商工業主義、資本主義の産物であって、農村を踏み台にせねば成立しないものである。生産機能対搾取機能、都市対生産者という見方を

すれば地主は都市に隷属するものであって、対地主闘争も対都会闘争として闘われるべきである、と説かれている。

〔理想社会〕

犬田の理想社会像は、端的にいえば農業生産を基礎とする農工合致の無支配・無搾取の共働社会である。「愛の結合体」である家族、又は村・部落を単位とする。自給自足を原則として必需品は相通じあうこと。重要とされる「原生産」に必要な物質の生産である農業だけでなく、芸術・科学・宗教・教育の精神的「原生産」も含めていること。土に生きる、つまり大自然と関わって生産することが、心も身も健康的にして人間性の自由な発達を実現すると考えられていること、がおもな特色である。

農業を基調とすることを強調するところはアナキズム思想一般の理想社会像の自主自由の強調と異なっている。農業と商工業とのちがいを犬田は次のように考えていた。農業は「人間生活のもっとも根底的なものとしての土」（犬田、土Ⅱ p 51 [昭和2年12月]）——いわば物質的・精神的の両面をもつ大自然——に最も近いところにある。都市労働者も農民（「土の労働者」）も同じく資本家から搾取されているが、労働の本質において次のような大きな違いがある。都市の商工業の労働は器械的で産業主義に付属して、資本主義に直接隷属する。土の労働は有機的で生産主義に立脚し、資本主義に間接隷属するが独立自主に資本主義なしでも存立する。そして新社会においても都市労働は農業労働に従属してはじめて意義が正しい。（犬田、土Ⅱ p 86-7 [昭和2年12月]）このように農業には「土」の絶対的正当性に由来する倫理的優位性があり、「土」の性質に由来する労働の性格における優位性がある。

〔理想実現のための方策〕

農業の特殊性、優位性、都会と農村の対立については論者が少なくないが、実現のための文学の力を重要視する議論については、犬田のそれは独自のものであったといえよう。農民をはじめとする全人類の物の見方・考え方を内面から無意識のうちに正しい方向へ訂正するのが「土の芸術」「土の文芸」の役割である。そのようにして農村を、社会を、根本的に新しくする原動力を与えるのである。社会革命の中で困難な分野である内からの革命を芸術のもつ特殊な力によって遂行できると犬田は考えた。社会因襲によって悩まされた犬田の経験によるのであろうが、農民運動では地主や政府や法規に対する政治的な運動よりも、因襲・感情に対する闘いの方が困難で、この闘いは文芸によってこそなされるとされた。（犬田、土Ⅱ p 68-9 [大正15年12月]）また人の心（心）と社会経済関係（物）には相互制約関係があって、心は物に制約されると共に、それを克服し新たに決定していく力をもっているとしたので、芸術によって人心に作用することによって、経済の諸関係を動かし土の社会の建設を進めることを可能と考えたのであった。（犬田、土Ⅱ p 68-9 [大正15年12月]）また実際運動と文芸運動等の精神運動は相伴う必要があり、前者は「盲目的盲目的運動」であるのに対し、後者は「未来に徹する眼を付する」ことができると考えていた。（犬田、土Ⅰ p 102-103 [大正15年10月]）

こうした論は、非唯物論的であるともいえるが、この犬田がアナキズムに対して唯心的であるとして批判していたのである。アナキストの社会像は「個人の自由といったやうな唯心的なものを出発点とする」のに対し、土の社会の考え方では、人はまず蛆虫であり、同時に知的存在であるから、個人の自由の前に「土といふ唯物的な实在観念を前提条件とし、物心両面を体得してその中道を進む（犬田、土Ⅱ p 57 [大正 15 年 9 月]）」という。芸術の力による社会変革の根本に「土」という实在の、また精神的でもある大自然があることが、犬田の運動論を現実的實在的なものと自認させていた。

アナキズム文学との比較のついでに、他の諸文芸との比較によって、今少し犬田の農民自治主義像をはっきりさせていこう。

農民文学論を主張するとき、まず大正期に混同され犬田が相異点を強調せねばならなかったのは、郷土文芸といわれるものであった。犬田は従来の郷土文芸は「盲目的な、無批判な郷土愛から出発」し、在来の郷土の詩・美を保存しようとする保守的・退嬰的な文芸であり、一方犬田の土の文芸は「徹底した批判の上に立つ所の郷土愛」による、伝統破壊と新生活の創造を行なう革命的・前進的文芸であるという。（犬田、土Ⅰ p 126 [大正 14 年 3 月]）

次にプロレタリア文芸の一分派と見做される誤解に対しては、共通点は社会の変革を目的とする点のみで、方法も目標も全く異なるという。（犬田、土Ⅰ p 130 [大正 15 年 11 月]）マルクシズムは心の面をおざなりにして物の面一点ばりである、農業理論については農業と工業の根本的差異を忘れて大農法をとく、都会人による都会的商工主義である等、犬田の以上の論からは当然に、マルクシズムが批判されている。

また大正から昭和初期に流行したトルストイ、カーペンターらの「これまでの農民思想、土の思想」は「宗教的であり、隠遁的で」「あまりに唯心的であった」（犬田、土Ⅲ p 42 [昭和 2 年 8 月]）とし新しい農民思想は、物（組織の力）を考え、組織的、大衆的となるべきだという。

b) 鑓田研一

犬田と比べると鑓田には体系的理論指向がやや強い。犬田とならぶ農民派の論者で、彼の「無政府重農主義」の語にも窺われるように、自らの思想をアナキズムに位置づけ、アナキズムと明示している雑誌にも多く執筆していた。犬田は評論以外に創作も多いが、鑓田はもっぱら評論活動をした。以下昭和 3 - 4 年の論文を集めた『無産農民の陣営より』（昭和 4 年 11 月）を中心に、彼の重農主義又無政府重農主義を見ていこう。

鑓田には『農民の経済学』のパンフレットもあるように、新しい「重農経済学」の構築に努力した。もちろんかつてのフランスのケネーらの重農主義経済学ではなく、鑓田にいわせれば、マルクス主義を止揚・克服した「マルクス後派」の経済学である。（無 p 45 - 67 [昭和 3 年 5 - 7 月]）唯物弁証法によるマルクス経済学に対しては何度か批判を行なって

いる。「近代的都市工業に於ける資本主義の発展法則」を基本的要素としたため、都会本位・工業本位の理論となり、また無産階級は都市プロレタリアを中心に考えられている。そして農村と都会は人間と猿のように歴史的関係で、つまり農村は都会に遅れたものであるから先行する都会を解剖すれば一方も理解できるとし、都市の農村搾取を問題視しない、等々。こうして「無産農民階級を下敷きとし、都市プロレタリアを足とし、其の前衛（専門的政治家）を頭とした、強権主義的社会運動理論」（無 p 111 [昭和4年5月]) となったとする。

これに対して、鑓田の重農経済学では、農村の生産・社会を重点的対象とし、それと関連するものとして都市のそれを問題とする、マルクス主義とは逆の扱いをし、また科学的方法と倫理的方法を併せて採用するといっている。その第一の要素は農業の工業に対する優位性の立証である。鑓田の場合は、犬田の「土」のような観念的概念は登場しない。倫理的に考えるというのは、人間生活に対する客観的重要度を尊重すべきことを指しているように思われる。農業生産産物は、まず第一に、不可欠・重要な生活必需品で「絶対価値」を持つ、次に農業以外の生産（加工生産）の前提、社会の富の第一の創造者である。ここに農業の第一義性があり、農業を基本となすべき理由がある。この上に重農主義が建てられるのである。

鑓田において重農主義と無政府主義は一致させることができるものと考えられていた。上述の農業第一主義が重農主義であり、それと無政府主義が結合されたのが鑓田の無政府重農主義である。トルストイを従来のレッテルの人道主義などでなく「無政府重農主義」と性格づけ、トルストイとクロポトキンの類似点をのべ、フウリエ、ブルードン、石川三四郎を「無政府主義的であると同時に重農主義的」と評価した文章が鑓田の初期評論にみられるが（農民 1-1 [昭和2年10月])、そのころ無政府主義がまとまったと考えられる。経済的には重農主義をとって農業生産を本とし工業をその加工の範囲にとどめ、社会的には自由・自治の原理に力点をおく無政府主義をとる、そうすることによって無政府主義は重農主義を人間の面で安定させ、重農主義は無政府主義を経済的に安定させる。（無産～ p 143-9 [昭和4年9月]) およそ無政府重農主義は以上のように考えられていた。

農業が本とされるべきであるにもかかわらず、資本主義のもとでは農業は機械的生産をする工業に比べて自然力を主な生産要素とし生産周期が長いいため資本回収が緩慢であるところに加えて、収穫逡減の法則が働き、経済的にははなはだ不利で、そのことが農業に対し工業が優位に立つ根本的原因となっている。

都市と農村は絶対的に対立しているとされる。都市は農村を搾取し、農村の犠牲の上のみ成立するという。都市農村対立のひとつの原因は、農業に対する工業の前述したような優位的性格によって都市の資本家が農民を搾取することにある。商人と農民の間の交換によっても農民は搾取される。また都会の権力階級は農民から租税を奪っていく。都会のうち商業都市は何ものをも生産しない。「絶対消費体」であり、工業都市も、農業という「原生産」を行なわない「相対消費体」なのである。（無産～ p 146 [昭和4年9月]) こうした経済的な性質以外に、都市は中央集権制度による政治的な支配を行なう政治的性質を持つ

ているし、人口集積によって欲望が発達したり購買力が高まったり、学問の中心となることなどによって、文化的にも農村に対して都市の優越性を主張する。都市は、経済的にも政治的にも文化的にも農業を経済的思想的に基調とする思想からは否定さるべきものとされたのであった。

この都会の中に、マルクス主義にあつては運動の第一の担い手とされた労働者も住んでいる。鍵田は労働者について如何に考えていたのか。この問題については明確にも「労働者も農民を搾取する」と題した論文がある。（「農民」昭和5年4月・7月、以下の引用は昭和5年7月 p 36-40）労働者が農民を搾取する第一の様式は「交換過程に於ける搾取」である。「凡ての農産物価格が都会本位の法則に従って決定される現在では、労働者も、他の都会消費者と同じやうに」農作物を八百屋で買うときに、生産費より安い値段で買うことによって、意識せずに搾取している。第二の様式は「使用価値の搾取」つまり「生産物そのものの横奪である」。一部の労働者をのぞき、労働者は農民にとって「全く無用の存在」であつて、生産物は「農民から都会へ一方的に流れることになる」。労働者の「日常生活に於ける消費程度は、農民のそれに較べると遥かに高い」し、労働者人口は大きく、その上に都会人として文化的消費が加わるので、農民を搾取する程度がますます高まるのである。労働者を分類すると、労働者の生産には①政治的必要に基づく生産、②経済的必要に基づく生産、③文化的必要に基づく生産、④交通労働—の4部門があり、①③④の部門は農民にとって「全く無用の存在」である。第2部門の中にも各種の生産があつて、「農業上の生産手段を生産してゐる労働者」と農民は現在でも不完全ながら相互扶助関係があり、新制度の自由共産体の下では完全な相互扶助関係になることができる。「加工的生活資料（生活に用いられる工業製品—三原）を生産してゐる労働者」は、それを農民が使っている分だけの不完全な相互扶助関係にあるが、現状の生産は大部分が「都会的欲望の発達した、労働者自身をも含む都会人を対象としたものであるから」、このままでは新しい相互扶助関係にはいることができない。以上のように労働者は都会居住者として、無意識的に、消極的にではあるが、農民を搾取する、と論じられた。

それでは農民の運動と労働者の運動との関係はどうなるのか。労働者の農民に対する搾取が認識された上で、農民を中心とするあらゆる搾取者に対する闘争に、労働者が参加するという形でのみ、同盟が可能とされた。都会は滅ぼされるべきでかつ滅びつつある存在と鍵田は考えていたが、労働者は都会と水と魚の関係にあるものであり、農民の同盟軍の立場を越えてはならないとされた。一方、重大な生産である原生産に従事する農民こそが、また地主や資本家・労働者から搾取され最も悲惨な生活を送る農民こそが革命運動の主人公となるべきであるとされた。マルクス主義とは反対の農民優位の運動論である。重農主義の理論から演繹されるだけでなく、次のような事情もその理由となっている。当時鍵田の眼に写った労働運動の自己保身的な傾向——海軍の労働者が失業を恐れて軍縮に反対することなど——が、組合運動の進展とともに強まり、ますます彼らは革命性を失うであろうと考えられたこと、鍵田も他のアナキストらと共に、農民闘争は大衆的になるほど「そ

の地理的・経済的・心理的条件にもとづいて、ますます自由連合的になる可能性を持ってゐる」(黒旗の下に1号〔昭和7年9月])と農民の性格を信じていたことである。

c) 加藤一夫

第2次『農民』のところで触れたように、アナキストの出身で第2次『農民』から農民派に参加した。そののち第3次『農民』から犬田とともに日本村治派同盟に加わり、農本連盟にも参加している。8年にはその頃の考えをまとめた『農本主義・理論篇』『農本社会哲学』を出版した。

まず第3次『農民』と友誌で、加藤が中心となって創刊した『大地に立つ』(昭和4年10月～6年1月)の旗標をみよう(実見できず、『農民』昭和4年11月による)。創刊号の出された4年当時の加藤の主張が窺われるからである。「一、人間は『大地に立つ』て生きねばならぬ。一、社会は『大地に立つ』てその機能を発揮するものでなければならぬ。一、『大地に立つ』者とは他人を土台にすることなく、それ自ら生活の根源より発するところの生活をなす者である。一、『大地に立つ』にはおのづからその方法がある。頭を地にしては大地に立つことを得ない。足を浮かしては大地に立つことを得ない。一、我等は『大地に立つ』ことを学ばねばならぬ。」いささか旗標というには曖昧であるが、人間生活と社会機構が「大地に立つ」必要が強調されている。この「大地に立つ」とは具体的には「農業」のことである。農業を「大地に立つ」と表現することに象徴されるように、加藤の「農業」には自然に対する宗教的な思い入れが色濃い。『大地に立つ』の文章は多く8年発行の『農本社会哲学』に収められた。以下では2冊の単行本を中心にして加藤の主張を見ていこう。

今までに見た論者と同様に、加藤もまた都市は農村を搾取すると考えていた。社会的に分業があり、両者が交換を行なうとき、その過程で価格の差から搾取が行なわれる。公租公課負担の差、金融機関による貨幣の都市集中、都市中心の教育などによる搾取もある。都会は農業生産に従事せず、農村の犠牲の上に成立するものであって、不用のもの絶滅すべきものであって、現実にも農村の行詰まりからその上に立っている都市も行詰りつつあるとした。新しく実現されるべき社会は、農を基調とした生活・社会である。具体的には万人が農業に従事することを原則とし、商業は「農に関連し、農に基礎を置いてのみ存在し得るもので「農のうちに没入融合」(農本主義 p 58)し、工業は利益のための生産でなく、必要のための生産に限定して存在する、農耕者に酬いることのできないものは非農耕生活を送る資格はないとされる。社会の基礎は共同村落(コミューン)といった小さい単位にすれば強制的統制なくして共同生活が行なわれるとしている。実現のための手段としてまずあげられているのが、思想・精の啓蒙・宣伝・説得・暴露であって、そのほかに商業を不用にする消費組合、信用組合等の運動によって農本社会を準備することが勧められた。農家の負債整理方法、農村教育の具体的プラン等についても論じられている。

以上については他の論者とあまり変わらないが、以下は加藤に特有の論である。

まず、アナキズムという人間を第一義に考える思想の出身者らしいというべきか、社会

のあり方よりも人間の生き方を根本として農本主義を考えている。「人類生活の本質を価値の実現に在る」(農本主義 p 61) と見るのである。現実の力に対して人間の主体的な意志によってなされる行為を重んじるのである。これに応じて歴史の発展もまた、生産関係が人の意志を支配するよう見えるときでさえ「生産関係そのものが先ず人間の生活態度もしくは文化の特質によって支配されることの方が多い」(p 158) とし、意志に重点をおいて両者の交錯に歴史の原動力を見た。

さてこの価値実現は農本社会においてのみ可能であるとされた。それは「農」のみがもつ特殊な意義による。「第一に人類の生活の根底は何と云っても栄養と活動とであるが、農はそれを実現するところの原初的な任務であり、第二に、農は自然と融合し、自然と共に宇宙的生活を生きる事であって、生活の最も始原的な、而も、究極的な意義がそのうちに含まれて居るからである」(p 326)。第一の理由は、これまでもしばしば聞かされた食料や原料の生産を行なう農業が根本であるとするものである。第2の自然観については、犬田の「土」以上に宗教的色彩が濃厚である。「自然それ自身に於ては価値以上……道徳以上……それ等(価値と道徳—三原)を含めての更に更に大なる生命……絶対である。そして人は此の絶対没入することによって、人間的価値以上の絶対的価値を実現する。……凡てが自然である。凡てが自然の道である。然り農とは道である。道との合体、これが農業である。欺瞞、陥擠、支配、策謀、圧服、これ等都市的な行為に対して、如何にこれの自然であることか、如何にこれの道なることか。只だ天を畏れ、天に則る。そしてここに言説の外にある道が流れる。……」(p 20)。自然と農業への讚美もここに至っては、現実と観念のギャップの深さに言葉が出ない。加藤は自然を道、絶対と称するほかに神、ロゴス、真如、一大現実世界、根、無、天、地、などとも表現している。物理的実体的な対象から神へと昇った「自然」である。そこでこの自然との融合であるとされる農業も、単に経済的な現実の必要による重要視を越えて、「道徳的宗教的」(「農本主義」p 53?)な重要性をもつことになる。

こうしたいわば自然信仰を基礎とする農業観が加藤の主張の第一の特色である。もうひとつの特色は東洋と西洋との対比である。加藤の二元論は、すべての対比されるものを東洋文明と西洋文明の性格の対比にあてはめる。たとえば農村は東洋的であり、都市は西洋的である。加藤の東洋・西洋に対するイメージを明らかにするために、それぞれにつけられた語をアトランダムに列べてみよう。

西洋文明の個性……ギリシャより、智的(科学文明信仰)、唯物的(科学による物質文明)、活動的外展的、支配階級的文明、政治と結びつく、国家のため、制服、進歩の思想、近代、物質、科学、……

東洋文明の個性……支那より、生活的、精神的、沈潜在的内向的、民衆的文化、政治排斥、国家軽視、社会重視、王道思想(権力ぬきの平等の天下)が権力思想を抑制、自然に生活の道を見る、人間生活と社会機構を大地に立たせた生活原理と社会統制原理、解脱、完成の思想、天地自然と共に流れる、……

上の言葉でもわかるように西洋文明を否定し東洋文明の性格を是としている。西洋文明は「人間生活の外的拡張を企及するところに生れ、従って、外的生活を快適にし拡大するに必然なる科学的知識の獲得とその応用とによって生成発達するところのもの」であり、利便、快適、能率増進等とそれに伴って起る諸々の害悪も西洋文明の特徴となるから、この文明そのものを否定せねば害悪はのぞけない（農本社会哲学 p 54）。「物質的享楽でなくて精神的悟得」をめざす東洋文明は「生活態度及び思想が全部正しかったと云ふのではない。けれどその根本の動機に於て、これこそ人類至高の世界への、その正しき組織への、その全包括的な思索への、正しき方向である」（p 58）。こうして結論は東洋文明へ帰れということである。

都市は物質的欲望充足のために働くが、農村では農業の自然と融合する性質上、都市ほど欲望的になりえず、農民の「精神生活は今日もまだ失はれて居ない」（農本社会哲学 p 198）。原始民族の信仰や「共同的な精神や習慣」が「彼等の心を平安にもし、力づける。同時にまた、利害の外に別の世界を持たしむる所以ともなつて居る」（p 198）ことを高く評価している。その農村に西洋的な都会の物質文明・気分が侵入し、農村の精神生活が失われつつあることを嘆くのである。

初めに述べたように、加藤によれば人間生活の本質は価値実現にあった。あるべき理想・真理を追求して生活態度や社会機構を変えていくのが加藤の考える、人間のなすべき行き方であった。絶対的な自然と融合する農業こそが正しい道であり、個人々の生活も社会組織も農を基調とする社会へ向かわねばならないというのが加藤の農本主義であるが、それが西洋文明は否定すべきで西洋と対比させられた観念としての東洋へ帰れの叫びと一体になって主張されたのである。犬田、鏑田ほかの農民派、また自連派の論の中に、ほかには加藤のような論は見えない。農本と東洋の結合、または日本国家の特殊性との結合は、のちにみるように、いわゆる右翼的な農本主義の道へと通じるものである。

d) 延島英一

印刷工出身のアナルコサンジカリストで、外国語に強い延島が、農民芸術連盟の主要メンバーのひとりであったことはたしかである。第3次『農民』の創刊前に自連派が「例のヨタ物延島英一は……農民自治会の糟共をかき集め、農民芸術連盟とかを始めたそうだ」（黒色青年 19 行〔昭和4年3月〕）と書いているくらいで、延島が参加しているために『農民』がサンジカ派とみなされたふしがある。5年10月には『農民』の友誌の一つ『解放戦線』を創刊し、その編集発行にあたった。

彼の主張は、農業を工業より優位に立つと考える農民派の農本的メンバーとは異質である。まとまった形で考えを述べているのは7年2月の『農本社会』創刊号に対する反論として書かれたパンフレット『無政府主義と農本主義』くらいしかないが、そこに展開されている主張は5年の夏に鏑田と原生産・加工生産をめぐる論争した頃からあまり変化がなかったと考えられる。

第3次『農民』5年10月号に延島の「農民経済学の一考察」という論文が掲載された。編集後記に「延島君の論文は、長い間編集会議及び研究会で問題になった原稿だが『自由討究』の一資料として一先ず発表することになった」とされているものである。内容は、ケネー以来の原生産と加工生産の分類論に対する批判である。『農民』では一般に、とくに鑓田がまとまった形で論じたように、原生産を農業、加工生産を工業とし、原生産は必要不可欠の食料と加工生産の原料を生産する基礎的生産であるとされていた。延島は、どちらの生産も人工を加える生産行為であって区別はなく、工業も自然に対して直接加工する場合がある、飼育・栽培のように対象物の生命の発展を目的として労働を加えるか、それを目的としないで労働を加えるかの違いにすぎないとした。

その上で工業の役割の大きさを強調した。まず生産の歴史の上で、農業は道具の製作、すなわち加工生産を前提として行われた。原生産が先でなく、加工生産が先である。農業の発達についても、工業の進歩と相俟ってこそ発達したのであるとされる。工業の方が農業より進歩が速いもの、農工が分離・対立関係にある社会では、農業が工業によって、農村が都会によって搾取されるのであり、分離・対立関係をなくせば搾取関係はなくなるとする。

『無政府主義と農本主義』に至ると、一層工業の重要性が強く主張される。「人類の基礎産業はむしろ工業である」(p 22) その裏には農産物の加工よりも道具の生産こそが工業の「太宗」と考えられている。そして工業は農閑期に農民が従事して行なわれうるものではない。工業が分散するといっても「各村毎にすべての工業が行はれるといふやうなことは、決してあり得ない」(p 15)

延島にとっては工業の形を農業に合わせて改めるなどという論は考えられず、現実の工業を念頭において語られている。科学技術の進歩を素直に受け入れている感がある。農業についても工業の成果によって発展し、近いうちに自然農業が抛棄されるだろうと考えている。「土地の構成を、化学と工業との力を藉りて人為的に変化せしめること、これ近代化学が実現を焦慮して、しかも経済秩序のために実現を阻止されてゐるところのものである」(p 13) と科学の進歩への期待を表明している。

都会についても、都会—農村の対立・搾取関係を、資本主義社会に限らない支配・搾取のあるところすべてに共通するものとせず、「都会は資本主義の一構成要素」(p 51) で資本主義を否定すれば、都会は解消すると考えている。

何故長期間延島が『農民』に関わってきたのか不思議なほど、犬田や鑓田と隔たっている。7年の段階で、原生産・加工生産という「さういふ古ぼけた時代錯誤の迷論は、犬田卯、鑓田研一の二君の専売である」(p 25)、犬田の農民自治主義は「世界独特の思想であって、唱へ出してから十年ばかりになるが」夫人(住井すゑ氏)を除いては「一人の賛成者もこの日本にない」(p 33) などと口をきわめて罵っているが、それ以前は呉越同舟だったのだろうか。

では延島は、いかにして農工の分離対立をなくそうというのか。この点についてはサン

ジカリズム的樂觀主義が見られる。「道具の生産が社会の一部人の独占に委ねられ」(p 47) ない形にすればよい、経済的組合の様式による無政府主義の社会をつくれればよい、というのである。現在の工業を根本的に変革することを考えてはいないようである。農本でなく「人類の有する生活手段のそれぞれに、充分その特徴たる機能を發揮せしめ」(p 58) るべきだという言葉などから、それが窺われる。

それならば、なぜ『農民』に拠っていたのだろうか。延島が「農民運動の絶大なる革命的意義」を考えていた故であると思われる。「農民はすべての階級社会において、常に最も搾取される階級であるといふ事実、従って農民が起つ時は、即ち無産階級社会実現の時であるといふ認識に基づく」(p 53) からである。決して農業の他産業と異なった特殊な性格や、自然といった観念によるものではなかった。『農民』を見る限りでは、農民派は犬田・鎌田らが圧倒的多数の主流であり、延島は異端的存在であった。延島は重要なメンバーであったらしいが、彼の執筆回数は少ない。

第3節 自連派の動き

第1節で見たように、アナキズム運動の目をおおわんばかりの低調の中で、農村運動の情勢報告はますますさびしい。もう実際運動は存在しないといってよいくらいであり、相変わらず、都会労働者が都会資本家の手先となって農村を搾取していること、都会に住む者が都会破壊をすべきことなどが論じられている。この節では5年の『農民自由連合』誌、多少の農村運動を行なった大阪のアナキスト青年連盟の活動、そして次章の時代へと続く農村青年社運動の出現について見ておきたい。

a) 『農民自由連合』(5年6月、8月の2号)

全国自連内の「農民自由連合」によって発行された『農民連合新聞』農村版というべきものである。「農村の解放運動は、……ボルや社民一派の横行と無産政党的名乗る泥棒猫共のためにかきまはされ……その限りなき飛躍と創造による解放行動はともすれば彼等の術中のうちに埋ぼつされ様とした、だが……我等の自由連合戦線は尤も強大な地底の運動を続けて来た」(自由連合新聞 47号 [昭和5年5月]) と現状の運動状況を捉えた上で、「地方戦線に於ける機関紙」として発刊されたのであった。

その第1号に、かつての農村運動連盟(2年に結成)は、木下茂の病床等の事情で休息状態にあり、「我々と相連関係をもつ同志の農民自由連合に一切の事務を委ねる」(1号、昭和5年6月)と木下が書いている。自連派の運動体は、『小作人』を発行していた農村運動同盟から農村運動連盟、そして今回農民自由連合へと変遷したことになる。

『農民自由連合』には農民派を批判する論文がいくつか掲載されている(木下茂、菊池晴吉、久谷善次、八太舟三)。その論をまとめると、およそ次のようになる。農民派は農民と労働者を分断して闘争させ、両者の相互協力を妨げるものである。労働者が農民を搾取するのではなく、農民のみが特殊な地位にあるわけではなく、現在では「非常に複雑な搾取の網」があって「万人が万人を搾取する」(木下茂「都市労働者と小作農との関係につい

て」〔1号、昭和5年6月p6〕、菊池晴吉「アナキズムの立場から『農民』一派へp13」のである。都会を否定する考え方についてはアナキストこそが第一人者であり、都会が農村を搾取する原因は分業にある。農民・労働者ともに分業の廃止と都会の解体のために運動すべきである。木下は以上の論に加えて従前と同じく闘いの重点を農村におくべきだとも論じている。

農業の特殊視の有無という点で農民派との違いは大きいだが、理想とする社会は両派それぞれ、農工が融合された自主自由の共同社会であって、さしたる違いはない。ただ運動軽視と思想偏重の当時の自連派の傾向による、「根本的に間違った社会では、部分的に、一時的に、何をやっても真の救済にはなりません。」（八太「農村講座」昭和5年6月p24）、「資本主義を撤廃すれば農村も都会もなくなってコミューンが出来る」（由利劍三（八太の筆名）昭和5年8月「重農主義に反対す」p3）の言葉は、低調を窮めて実際運動のなくなったアナキズム運動を象徴する空景気であり、少なくとも文学論争や講演会等に活気を見せた農民派に比べると空虚な感じが伴う。『農民自由連合』は2号で終わった。

b) 大阪アナキスト青年連盟の農村運動

詳細は不明で『自由連合新聞』によって知る以外にないが、自連派と自協派の対立によって一層の沈滞を続けるアナキズム運動に対する反省と再生への早い動きがみられるのでとりあげる。6年1月、関西のアナキズム運動は東京方面より1年以上も早く自連・自協の統一へ向かった。「本年一月以来一切の過去を清算し、戦線を統一して以て甦生の第一歩を踏み出して」（自由連合～57号〔昭和6年4月〕）とあるのは、その意味と受けとれよう。こうして新団体で百貨店争議などを闘ったが、同時に農村運動も意図された。研究会のテーマに「都会労働者と農村小作人との関係に就いて」がえらばれたり、農村へのアナキズム宣伝を計画するなどである。その後の消息は不明である。

c) 農村青年社（農青）運動の発端

10年から11年にかけて、農村青年社の信州暴動計画関係者ということで、全国で360人が検挙された。農村青年社の実際はといえば、革命計画実行にははるか手前の資金獲得のための空巣・窃盗によって逮捕されて主要メンバーを失い、その時点でほとんど壊滅したのであった。農村青年社グループが存在したのは6年2月から実体的には7年1月のわずかな期間にすぎなかったし、爆破を含む革命計画が決定されたのは6年の8月になってからで、しかもメンバーの一部による決定であった。本稿では農村青年社の行動については割愛し、もっぱらその農村運動論を見たいと思う。

農村青年社が登場する第一の原因は、アナキズム運動の現状に対する絶望・反省であった。全国自連と自協のうち、自協はまだしも労働争議を闘っていたのであるが、全国自連の方では6年の大争議にすべて敗北して以来惨憺たるあり様であり、運動はアナキズム思想の確立を叫ぶのみで方針も立たない状態であった。農村青年社は、全国自連を含むアナ

キズム諸団体の解散と、新たな具体的運動方針を提唱したのであった。その発端が、まず『黒旗』5年6・7月の添田晋（宮崎晃の筆名）の「農民に訴ふ」であり、翌年2月の『黒旗』付録「農民に訴ふ」（両者は内容が異なる）であった。

5年の「農民に訴ふ」では、農民生活の行詰まりの現状、政治は金持ちと権力者のためのもので貧乏人のための政治はあり得ないこと、無産政党批判、法律は即ち資本家の法律であること、を述べた上に、「自給自足の共産体」または「自発創造の精神、相互扶助による共存共栄、分業と都会の否定のうえに立つ農工兼営の自由村落」を建設すべきことを述べている。ここでも論じられた「自給自足」が6年の「農民に訴ふ」では具体的に論じられて農青イズムの基調となった。農民自身の手で金のいらぬ世の中にするための経済活動を実行しようというのである。「1. 自給自足の実行、2. 共産の実行、3. 共存共栄・相互扶助の実行」が農青イズムの三大眼目である。必要な食料を作り、必要な道具を手作りし、町との物々交換もしない、一時は原始手工業時代のようになるだろうが我慢しよう。次第に食糧が欠乏する都会から共産相互扶助の農村へ労働者が帰ってきて工場ができるだろう。そして食・農が先決であることを忘れてはならないが、農工合体の共同社会がつけられるだろう。税金は納めず、年貢米も納めない。塩については村間で融通する。自給自足は空想ではない、必要は発明の母である。そもそも自給自足が可能だから行なうのではなく、それが「本然」だから行なうのである。こうして農村における運動をすすめるとき、必ずや支配階級が弾圧してくるだろうが「民衆の生活の中から創造的暴力が湧いて」民衆はみな立ち上がり弾圧に抗するのである。こうして農民自身の手による解放が成就されるだろう。アナキストによる暴力は不必要である。また農民組合、消費組合、協同組合（とくに自協派では運動方法として有力視されていた）は改良運動であって、解放に役立たない。以上が農青イズムの大要である。換言すれば、組織的には「結成主義を否定し、中央的組織を拒否し、自主的分散活動に徹した農青運動」（資料農青）、方法的には「自給自足を中心とする経済的 direct 行動による全村運動の実践（同）である。

この農青イズムは各地、とくに長野県で説いてまわられた。長野県ではいく人から在地のアナキストが精力的に活動し、村報による宣伝、全農内フラクの結成等、大きな勢力を集めることに成功した。ついには具体的な「アナキズム革命蜂起単位、やがて自由コンミュンたるべき地理区画」が決定された。革命敢行のための戦術として、弾薬庫・トンネルの爆破、都市の焼却が計画されるに至ったのも事実である。

農青イズムにおける運動論には、農業の特殊性・優位性や都会に対する反感情などはあまり見られず、革命の戦略戦術が先行している。これは何よりも行き詰った運動の現状打開を意図して提唱されたという事情によるものと考えられる。しかし、革命戦略における、村落で農業を基本とする原則的に自給自足の社会という構想には、意識の有無を問わず、農業の基本産業としての強みと、農村社会の相互扶助的性格が前提となっていることは明らかで、その点、自連派の従来農村観や農民派の農業観との間に大きな差異はなかったと考えられる。

第5章 運動再編成と路線転換（昭和6—10年）

第1節 情勢

前章（昭和4—6年）のすさまじい農業恐慌、そして農民の部隊も加わった7年5月の5・15事件。農村問題は緊急に解決すべき時局問題として注目されるようになった。5・15事件で開会が延期になった5—6月の第62臨時議会（いわゆる時局匡救議会）では、救農のための臨時議会の開催が決められ、その第63臨時議会（8月、いわゆる救農議会）では救農対策が決められた。対策のひとつが救農土木事業であるが、膨大な予算を費やしたわりには実際の農民の手には少額の金しか渡らず、負債整理組合法は対象が中農以上に限られていた。こうして金のかからない対策である農山漁村経済更生計画が自力更生を合い言葉に熱心に推進され、その後の農政の中心となっていく。この計画では精神教化運動が基礎となり、従来アナキストも讃えていた農村の「隣保共助の精神」が発揚されたのであった。

また、産業組合に貧農をも加入させたこと、農村の指導系統を従来の農会→地主から<政府—府県—市町村—農民>の直接統治する形へと変わったことなど、農村の政治構造にも変化があった。

62、63臨時議会の時から新しい大規模な農民運動が始まった。長野朗らの自治農民協議会を中心とする請願運動である。これは運動の目標を議会に絞り、請願署名集めと議員に対する訪問・葉書・電報による陳情、農民大会や議会デモによる示威等によって、農家負債措置（農村モラトリアム）、食糧米差押禁止法の制定などを求めたものであり、救農議会に対しては10万人の署名を集めたとされる。自治農民協議会は7年4月に結成された。様々な農本主義者が集まった日本村治派同盟（6年11月結成）が運動を始める前に分裂解消して、中の一部が結成した農本連盟が政治運動への進出をめぐる二派にわかれた、そのうちの一派である。長野や橘孝三郎（結成後すぐに5・15事件で離脱）、和合恒男らに、全農の稲村隆一を加えて結成された。宣言・綱領の起草など、中心になったのは長野である。その宣言を見ると、民衆の「自治」をあるべき姿としていると同時に、それが日本古来の伝統・建国の精神であり、土と人の結合の上に自治が行なわれ「皇室の藩屏として全民衆が皇室を捧持する時」（p21）、国体の基礎は不動となり、とされるように、自治する民衆の上に捧持される皇室と守るべき国体が存在することを自明のこととしている。同じく自治といっても、アナ系の主張とはその点が大きな違いとなっている。禍根である官治と営利と、「新たに起りつつある一切の非日本的なもの」（p21）（ボル派をさすと思われる）を打倒すべき点とする点はアナキズムと似ている。都市についても「主として官僚と営利業者とその従属者との合成になる農村寄生者の集合体」とよく似た論理によって否定していた。

さて全農はどうなったか。4年の4・16で大弾圧を被って以後、改良主義、合法主義への傾向がいつそう強まった。前章で触れたように、6年にはこの傾向に対する批判勢力

が全国会議派を正式に結成した。全国会議派は従来の全農の運動方法を変えようとした。小作争議の法廷闘争を中心とし、事務所中心主義、幹部引き受け主義、合法主義であった運動を批判し、部落中心の世話役活動に重心を移すべきだとされたのである（8年のことである、農民運動史 p 76）。また小作人以外の農民も運動に参加させようと農民委員会運動もなされた。しかし、全農においてもこの時期の運動は次第次第に沈滞に向かっていった。

アナ系の陣営においては、まず前章に述べた農青イズムによって地方遊説、文書配布が活発に行なわれた時期であるが、その他のメンバーも現状打開を真剣に検討する時であった。自連派自協派の両方に、対立から共同闘争へ歩み出す動きが見られるようになり、7年のメーデーで数年間の対立を越えて共同行動がとられ、9年1月に正式に合同が成立した。また自協派においては、アナルコサンジカリズムとアナキズムの関係等を理論的に検討する雑誌『黒旗の下に』が創刊（7年9月）され、自連派内でも、それまで教典的存在であったクロボトキンの再検討がなされ、理論的にも再生の道がさぐられるようになった。『黒旗の下に』のメンバーを中心に「戦線確立研究会」がつくられ（7年）、自連派を中心に自協派も加えた有志によって「日本無政府共産党」がつくられた（8年）のは、運動再建行動への第一歩であった。（第3節で詳述）こうした動きも10年秋からの農村青年社事件、無政府共産党事件による全国のアナキスト一斉検挙によって、ほぼ完全に弾圧された。

第2節 農民派分裂

前章においても農民派の全盛期に既に分裂が始まったことを述べたが、本章では分裂後の主要論者の言動を追ってみよう。第3次『農民』は7年1月まで続刊されるが、第1次以来『農民』に主要論者として関わってきた鏑田、犬田は、5年10月、6年末にそれぞれ去って各自の歩みをはじめ、もはや農民派といわれた人々が一堂に集まる雑誌は存在しないからである。議論がつきつめられた末、必然的な分解を果たした後の時期であるといえよう。

a) 犬田

第1次以来『農民』の中心となってきた犬田は、犬田の農民自治主義は即ちアナキズムであると主張する人々——犬田は延島をその中心者と考えている——によって、6年末に農民自治文化連盟（旧全国農民芸術連盟）から除名された。犬田の孤立化の原因のひとつは、彼が日本村治派同盟の発起人に名を連ねたことであつた。日本村治派の宣言（第6章参照）を見れば、犬田のような思想の持ち主が参加しても不思議はないが、延島らアナキストを自称する者たちにとっては、国家主義者と呼ばれる者も集まる村治派へ自ら参加するなどは批判されるべきことであつた。なお農民派中、日本村治派同盟の発起人には犬田と加藤一夫が加わつた。

日本村治派同盟が成立すると同時に内部分裂が表面化して曖昧な農本的宣言を残して消滅し、その内の一部の者は農本連盟を結成した。7年2月に『農本社会』が、本来日本村

治派同盟の機関誌となるはずであったのが今や農本連盟の機関誌として創刊された。村治派同盟から農本連盟への移りかわりについて『農本社会』1号の「農本連盟創立経過報告」によると、村治派同盟には農本主義者のほかに「反動的な日本主義者や、国家社会主義者を同数位交ってゐた」ので、機関誌を発行する段になって雑多な思想を発表せぬよう「村治派中の農本的色彩の者が別に連合し、それらの人々によって急遽『農本連盟』の組織が進められた」とある。

犬田は農本連盟に加わり、常務委員7名中の一人になり、『農本社会』（7年2月より9月まで7号）には毎号積極的に原稿を書いた。岡本利吉のイニシアティブによるといわれる（長野 p 13）綱領や規約は、犬田の農民自治主義と何ら矛盾するところがなかった（第6章）。この時期の犬田の農民自治主義の主張と、アナキズムとマルクス主義に対する批判は、以前と全く変わらない。時代が押し迫り、ファシズム批判が加わったのみである。たとえば「ファッシュの流れに抗して」（農本社会5月号）を見よう。「ファシズムは……高度資本主義の支配形態であり、従って統制化された生産階級——農民、労働者のより強化されたる搾取組織」であり「民族主義、国家主義、挙国一致主義」を伴って人々に陶醉させ味わせる。最近流行の「郷土教育」「郷土文化」は、資本主義を表面的には排撃してもそれを「肯定した、また肯定しなければ成立し得ない一種のファシズム——民族的、国家本位的な、限られたる愛国思想、愛郷思想への階梯である」と述べている。重ねていうと、犬田のこうした論は、農本連盟の綱領に沿ったものでもある。（なお農本連盟の青年部である農本青年連盟の機関誌は、かつての農民自治会の機関誌と同じく『農民自治』と称し、のちに農本連盟のシンボルカラーによる『緑旗』と改められた。旗色は農民自治会の色を受け継いだのではなく、岡本利吉の先駆者同盟の色によるらしい）

農本連盟は将来政治運動に乗り出すか否か等、運動方法についての意見では一致せず、村治派同盟と同様、種々雑多な寄り集まりであったから、途中で橘孝三郎ら愛郷塾が離れたあと、『農本社会』を9月まで発行して自然消滅した。

犬田はすぐに『農民』（第5次）を復刊した。発行団体は農民作家同盟であるが、ほとんど犬田の個人雑誌といってよく、8年9月まで続いた。ここにおいても「勤労・生産農民こそ現代社会の最下層の被虐階級であり、最後の被搾取階級であると同時に、未来を背負って起つべき唯一の基礎階級である……未来社会——無支配・無搾取の共働（農工合致）社会は生産農民——農業生産——を基礎としてしか成立し得ない」（「我等の立場」昭和7年12月）等々、主張に変化はない。

a') 『農本社会』の他執筆者の主張

犬田が最後まで関係していた雑誌『農本社会』はいかなる内容を持ったものであるか。最終の7号まで毎号書いたのは犬田と岡本利吉、4号まで続けたのは山川時朗（農本連盟書記長）である。他はもっと回数が少ない。長野朗の言葉によれば農本連盟第一回全国協議会（7年3月2、3日）の「出席者の大部は、岡本利吉の一派」で、綱領規約等、論戦

の内容も「岡本利吉派の色彩が濃厚であった」（長野 p 13）というが、実際に結成後、次第に「岡本一派」以外の者が去っていったものと思われる。加藤一夫らも書いているが、とくに見るべきものはなく、鑑田については後述するので、ここでは山川と岡本の主張を窺っておこう。けだし、二人は犬田と並ぶ当雑誌の主要論者であるからである。

山川は第3次『農民』の途中から加わり、村治派同盟から農本連盟へと参加した。住所が岡本の純真社になっているから岡本派と想像されるが、詳細は不明である。彼によれば資本主義は都市労働者よりも農民や植民地を搾取対象とし、資本主義と都会は密接不離の関係にあって都会資本主義として把握する必要がある。また、資本主義の内部（資本家と労働者）でなく外部的関係（農村や植民地との関係）をこそ見るべきである。現在の社会機構の下では都会資本主義文明が栄え農村は疲弊していく。最も搾取され資本主義と最も鋭く対立している国内と植民地の農民こそが真の革命階級であり、彼らが立ち上がり、農民・農村を基本とする運動によってのみ、都会資本主義は真に克服解消され、農工対立のない自治連合社会が実現される、とする。農民・農業・農村が基本とされるべき理由は、上述のように最初にして最後の被搾取者被支配者、被圧迫者であること以外に、農業が原料・食料を生産する基礎産業であり、農村社会が全社会の基礎であることを普遍的と見做すことにもよる。労働者は農民に共働し、農村へ帰るべしという。アナキズムは労働者本位のマルクス主義に比べれば多少進んでいるが、農業と工業、労働者と農民の相異を深く考えていないので結果的に都市的思想になってしまっているし、また問題の解決方法を示していない、と批判する。

岡本利吉は、周知のように、労働運動、消費組合運動に早くから取り組んだ人であるが、昭和になってからは独自の哲学を訴える活動と、そのひとつである農村青年共働学校開設に専念していた。岡本の主張の特色を概観しよう。まず彼は農業のみが永久に全人類社会の生活の基礎であることを、自然科学によって証明し、理由が伝統や「土の生命力」のような観念やケネーらの重農主義経済学等によらないことを強調する。つまり人類の生存に必要な有機物を得るためには、空中炭素を取る工業は成立しないので、植物の炭素同化作用を利用する農業が必要であり、また農業の性質は空中炭素を取るために、工業化、高度化が不可能であるというのである。ここから農業に多数者（人口の8割）が従事する必要が生じる。また搾取は、人間性に固有な「相愛扶助の社会性」に反する罪悪であり、それのない社会は「共働農業」によってのみ実現されるという。共働農業とは、個々人の自給自足は不可能であるとして、数十家族による生活団体で共働して農業を行なうことで、それが結合して生活組合（今日の町村）、地方連合（府県）、民族連合、総連合（世界）をつくるという。農業以外の職業はすべて搾取が常態で農業のみが搾取せず、全世界が農業を基本とすれば、永久平和が保証されると考えられた。岡本は農耕労働に従事したいよい仕事とはしていない。かえって苦しい筋肉労働だとする、それだからこそ万人の責任でなされねばならず、工業は青年期の数年に皆が従事すればよいとしている。農本共働社会の実現には、都会人は主に政治改造と啓蒙運動を、農村人は建設に努力すべきだという。

岡本の文章の中には「西欧人の自由主義経済学わ（ママ）、需要供給と言う巧妙な学理の仮面に隠れて、公然と三百年の商工業搾取を続けた。いま其行詰まりが到来した。」（2号 p 7）といった西洋文明批判の口吻は見えるが、この時期においては日本の伝統や東洋と農本を結びつけることはなく、農業の特殊性そのものから農本であるべきことが論じられている。

b) アナキストを自称する人々、鑓田、延島ほか

第3次『農民』に集まった者のうち、犬田らを除き、大部分は分裂後、農民自治主義や農本主義でなく、アナキズムを看板とした運動へと進んでいった。『農民自治』から第1～3次の『農民』『農本社会』の旗は緑色であったが、鑓田が発行した第4次『農民』、犬田除名後の『農民』（まもなく『戦野』と改題、『農民』と再改題）の掲げる旗はアナキズムを表わす黒色であった。アナキズム運動の2派のうち自協派に属する人々である。延島と鑓田はともにアナキズムを掲げるが、それぞれの主張が農業=原生産と工業=加工生産の問題をめぐる対立し、個人的感情も合わなかったため、別行動をとったらしい。この時期については、見ることのできた資料がきわめて乏しいが、第4次『農民』と自治連盟の『農民』の主張と、その後の運動の動向について概観したい。

第4次『農民』は農民自治会全国連合の発行で、編集は鑓田であり誌面の半分以上を彼が書いている。6年10月号と7年1月号の2号に終わり、そのうち第1号しか見ることができなかった。第1号で主張される最も大きなテーマは、第3次『農民』とくに犬田が中心であった5年11月から6年秋にかけてのそれに対する批判とそれを反面教師とした新しい自らの組織・理論の強調である。前述したように「黒旗」をかかげ、アナキズムの雑誌であることを明示している。

犬田ら第3次『農民』に対する批判点の第1点は、組織問題である。第4次によれば、第3次では発行団体である全国農民芸術連盟の連盟員と誌友との間に「階級的差別」があり、東京の一部の者を中心とした「中央集権的傾向」があったという。第4次では従来の状態を清算し、組織原理は『下から』のそれ、即ち自由連合主義：であるとしている。自由な個人が連合する「組織形態は、農民戦線に於ける闘争母体であると同時に、全般的×××（社会革命？）を転機として、そのままアナーキイ社会の農業組織——農業コンミュンとその連合となり得るのだ」（鑓田「組織・その原理と形態」 p 11）と、サンジカリズム的運動展望が見られる。批判点の第2は、第3次の特に末期において「文壇主義者、『有名になりたい』主義者、『小説を書くのが一番好きな』主義者、農民を食ひ物にする農民主義者に依って占領されるに至った」（p 9）ということ、こうして実践運動をなおざりにして、ジャーナリズムへのみ進出したことである。換言すれば「芸術運動全部主義的傾向」（黒岩周蔵「陣営雑筆」）ということになる。これに対して、第4次では、まず農村における農民自治の実際運動を重視し、そのための戦略戦術を練るという。5年頃から第3次の誌上では、実際運動における戦略戦術を論じる文章が増え、文学論としての農民文学を論じた

文章と並存していたが、そのうちの前者が第4次『農民』へ進み、後者が排除された形となっているといえる。

さて、第4次ではアナキズム陣営、自由連合主義の戦線に属することを明言した上で、なお重農主義もしくは農民自治主義も主張されている。重農主義はアナキズムの社会革命のために必要な経済的基礎理論であり、労働者と農民の同盟はそれによってなされねばならないとする。都会を否定すべきものとするというまでもない。前章に見た鏝田の、重農主義と無政府主義の結合による無政府重農主義による雑誌と考えてまちがいはない。

なお第3次と第4次の対立関係で、組織問題や芸術重視問題が顕在化したのは、「犠牲者救援会」に対して第3次（全国農民芸術連盟）が地方の支部が主体的に態度を決定することを否とし、また参加を躊躇したことが契機であるらしい（第3次〔昭和6年1月〕p5、第4次〔昭和6年10月〕p24-26）。これは共産党の影響下にあった労農救援会が広く諸団体に参加を呼びかけた時、日本自協がこれに応じ、自協派のメンバーが多い連盟内で連盟のとるべき態度について論議があったことをさしていると思われる（結局日本自協は参加しなかった）。（山口健助『風雪を越えて』）

次に自治連盟の『農民』を見よう。これについては、いつからいつまで何号出されたのか、誰が参加したかも不明である。犬田は延島が中心であると考えているが、編集発行人は土屋公平となっていて、そのあたりの事情もわかっていない。以下では7年10月の第4巻第10号と、『黒旗の下に』（7年9月～9年3月、12号）等を参考に手探りしていきたい。

まず自らの主張を次のように性格づけている。過去の農民自治主義には「二つの別系統の思想が未分化のままで雑居してゐた」、その一が「重農主義乃至農民社会主義系統」、「重農主義的色彩の系統」であり、もう一つが「アナキズムの系統」であり、両者は日本村治派結成を機に分裂した。我々は後者である、と。（松尾淳「新しい問題」p2）前者は犬田・鏝田らの農業を他産業とは本質的に異なるものと見做す人々を指していると思われる。自治連盟は農民を労働者より特殊な優位性をもつものと見ない。次の言葉に窺えよう。「我々は小作人、農業日傭人を基本部隊として農民階級を考へてゐる」「同じく搾取下にある、有力な同盟軍としてのプロレタリアートと提携共働」「農民イデオロギーも、プロレタリアイデオロギーも、アナキストコンミニズムをその本質に持つてゐる」（自治連盟「農民文学とは何か」p1）等々。却って、農民、農業を特殊視する傾向を警戒し、「ややもすれば、農民自治主義的になり易い農民主義の運動を正しい方向に引きもどすのが偉大な彼（マラテスタ——三原）の力である」（呉尾鳩子「マラテスタの農民観」p3）とさえ述べるに至る。さらに、自作農の意識の中には「小所有者根性」と、「破産しかけてゐる自己の経済的地位を正当に認識した結果」の変革必要性の認識とが葛藤していると、農民自治主義者とは異なる農民に対する否定的な評価さえ見られる。こうして農民・農業の特殊性を否定した上に立つ自治連盟の主張は、小作人・農業プロレタリアートと都市労働者への共闘によるアナキズム実現へ向けた運動となり、もはや農民文学とは、アナキズム文学の中の一分野で農民を扱ったものであるにすぎなくなる。現状における工業の農業に対する、

また都市の農村に対する優越の打開については、工業と農業は必然的に融合されるよう進化すると考えるクロボトキンの楽観論をそのまま受け入れている感がある。農民の運動における役割が相対的に小さくなり、農民を労働者による主力部隊の同盟軍と見做すボル派に接近しているといえよう。

この自治連盟『農民』は、アナキズム二派——自連派と自協派——のうち、明白に自協派に属していた。農民自治主義をアナキズムにあらざと主張していた犬田が除名され、残るメンバーは、陣営再編成の必要が痛感される自協派陣営の中で、他の集団と共同の研究会を持つようになった。7年9月に『黒戦』の後継誌『アナーキズム文学』（鏑田も参加か？）の人々と研究会をもち、『アナーキズム文学』11月号は「農民文学研究号」として出された。両誌の人々はほとんど対立する点なく、上述のような「ほぼ一致したアナキズム農民文学の正しい理論的形態」（「黒旗の下に」4号〔昭和8年2月〕p8）に達したものと思われる。次に自協派有志によって「『自協』、『農民』『アナーキズム文学』消費組合研究会等々の共同研究会の性質を帯びたる『戦線確立研究会』（「黒旗の下に」5号〔昭和8年3月〕p1）が始められた。こうして「雑多な」農民の戦線の中で『農民』は「今確固たるアナキズムにまで、イデオロギー的發展を遂げた」（p8）と僚誌から評されるに至った。さらに自連派の『自由連合新聞』『解放文化』とも話し合いの機会をもち、最終的に『アナーキズム文学』『農民』『解放文化』の合同へと進んだ。（しばらく合同準備紙を刊行したのち8年8月より『文学通信』発行）自連派自協派合同への道のひとつが自治連盟の人々を含む文学運動の分野で敷かれたのであった。

第4次の鏑田らのその後の足どりは不明であるが、少なくとも自治連盟については、アナキズムを強調することによって農業の特殊性を否定する方向へ進んだといえよう。

第3節 自連派の変化

a) 農村青年社（農青）に対する批判

農村青年社の主張は、前章において述べたように自連黒連の存在を不要とする農村コミュニケーション建設論であった。それに対してこの時期『自由連合新聞』（自連派）の紙上で度々触れられた。批判という程論理だったものではなく、論調は岩佐作太郎の座談会中の発言「実行力のないもの程、文書に口に勇敢なコトバを吐くものだ」（67号〔昭和7年2月〕）によく表われている。「勇敢なコトバ」とは、全国の農村運動の状況を網羅した「全国情勢報告」（6年11月）、蜂起を煽動する「吾国に於ける革命の完行に就て」（6年12月）の両パンフレットを筆頭とする配布文書をさしている。少くとも『自由連合新聞』編集部周辺では、農青は実際運動を知らずに勝手に放言している、と冷眼視していた。そこでまもなく窃盗罪で宮崎晃が逮捕されたときも、「スパイの好餌となる宮崎晃」の見出しの下に彼を「過般より吾等が運動の片隅で実動の無智をおかして僭越の言辞を弄して吾等が運動の中傷攪乱、延いては一人よがりの悪煽動をして居た一味の黒幕」（67号〔7年2月〕）と紹介し、その一年余後にメンバー中ひとり残っていた鈴木靖之が農青機関誌の後身にあたる雑誌を出す

と、「この連中は少し如何かしてるんぢゃあるまいか。合法的に出版しながら秘密団体だ秘密行動だとコケおどしもこうなると困りものだ」(79号〔8年4月])と強い言葉で非難している。しかし、農青の運動は東京のメンバーの動向とは別に11年初頭の弾圧まで、長野県をはじめ各地方で地道につづけられた。また『自由連合新聞』の方でも次にみるように、思想宣伝偏重から実際運動へと路線を転換していった。

b) 自連・自協の路線転換と合同

無政府共産党の方針

6年頃からの左翼運動全体の後退の中で、アナ系陣営は自連も自協も一層の後退を余儀なくされ、陣営内には従来の運動に対する反省が様々の形で起こってきた。その嚆矢が農青であったといえよう。自連自協両者においてアナキズム陣営が分裂対立していることの愚に対する反省がなされ、自連では労働組合等の組織や日常的闘争・大衆闘争に対する軽視が、自協では労働組合万能主義が、それぞれ反省される。こうして両者の間に合同と具体的な闘争の必要が痛感されるにいたる。7年のメーデーでの共同行動を契機に、8年春の自協関東地方協議会第3回大会、自連第3回大会ではそれぞれ互いに出席し合い、方針を転換することを明らかにした。さらに9年3月には正式に、自協が自連に帰る形で合同大会が開かれた。自連第3回大会(議論の前に解散)に向けて準備された新綱領には、従来の思想的宣伝偏重とは対照的な「日常一切の闘争を通じて」の文言がはいっている。この方針が8年初めより『自由連合新聞』紙上の農村運動記事に如実に表われる。

自連の路線転換について、無政府共産党のメンバーの果たした役割も大きいものがあった。無政府共産党は活動方針として次の二つを考えていた。ひとつはアナキストが核となって労働運動や文芸運動等、大衆団体の運動を活発化すること、もうひとつは中央集権的組織をもったアナキストの職業的革命家による秘密結社をつくることである。前者の方向は自連派が従来方針の反省の上に立って新しく目指す方向と同じであった。無政府共産党(当初は無政府共産主義者連盟)が結成されたのは8年の11月末であるが、それ以前からメンバーの一部は大衆団体の日常闘争と革命団体の必要性を感じ、それはそのまま自らが編集する『自由連合新聞』に反映したから、党の方針は7年末頃から表現化し始めたといっていよう。自連派の路線転換は党のメンバーが主導したとはいえないが、彼らがその方向へ向かうように積極的に働いたこともたしかである。8年1月、『自由連合新聞』は全国自連の機関紙からアナキズム運動全般の新聞として位置づけが変わり、「自由連合新聞社」の発行となり、「組織づくりをめざす記事」(相沢 p 125-6)が次々と掲載されるようになった。党結成後の『自由連合新聞』は党の準機関紙的性格をもつようになる。またメンバーは自連自協の合同にも尽力した。のちに10年秋になって無政府共産党が資金獲得にかかわる仲間の殺人事件と銀行襲撃事件によって、全国のアナキスト一斉検挙を引き起こしたことは周知のとおりである。

さて、農村運動に対する方針であるが、7～9年は『自由連合新聞』紙上の農村運動関

係記事が再び多く見られる。無政府共産党農民部担当の伊藤悦太郎がほとんど単独で農村向けに発行していた『闘ふ農民』も併せて見ていく必要があるだろう。『闘ふ農民』は『自由連合新聞』の付録として、8年10月から9年10月まで8号出された。

8年の年頭にあたって「農村運動の諸問題」が概括され、「二三年来」内部清算と内部的闘争に精力を集中し、改良的・日和見的態度を排撃するあまり「現実的な社会の諸問題に対する無政府主義者としての積極的な闘争がなされなかった」、いたずらに「看板」的存在となって弾圧をこうむり、諸問題に対して批判観察をするのみで村民としての闘争をしなかった、「官製的或は反動的団体」に対してもぐり込み働きかけをしなかった、などの厳しい自己評価がされている。反省に続いて新たに「日常闘争」の語が紙面にさかんに登場するようになる。

まず、労働組合、農民組合、消費組合等の大衆団体を「大衆自身が今日の窮乏せる生活を改善したり維持したりする為に組織するもの」で、「一個の思想によって規定されることは不可能」と規定する(79号〔8年4月〕「アナキスト・グループと大衆の団体」)。そこにアナキストがはいって活動するのである。従来のように先に理論をもちこむのではなく、「生活事実の中から理論を発見し思想を鍛ひ上げて行く」(78号〔8年3月〕「農村運動をどう進めるか」)、「無産農民の経済利害を歩一歩力強く協力闘争する事に依って、闘争の中にのみ勝利があるの信念を抱かしめると同時に、農民の意識水準を絶えず無政府主義に迄昂揚すべく力を致さねばならぬ」(85号〔8年10月〕「積極的農民闘争で自主的闘争体を組織しろ」)。これらの指針は「アナキズム運動は無政府主義者の鼓舞による大衆運動であり、アナキスト××(革命)もかくして遂行される」(78号〔8年3月〕「日常闘争の諸問題に就て」と大衆運動とアナキストの役割が整理されたことによっている。

具体的方法としては「潜入」がさかんに提唱された。全農、全農全国会議派、その他の小作人組合の中にはいって、対外的には先頭に立って仕事をし、対内的には闘争や事実暴露を通じて大衆をアナキズムの方へ向かわせるという作戦である。また青年団や処女会に対する同様の働きかけもさかんに勧められた。「潜入」は実際に各地方で実行され、とくに長野では農民自治会、農村青年社以来の同志を中心に、全国会議派組合における運動が進められた。自前の有効な組織をもたないアナキズム運動が見い出した現実的方法であったといえよう。同時に自前の組織確立の必要も叫ばれてはいる。(85号〔8年10月〕「積極的農民闘争で自主的闘争体を組織しろ」)

こうした実際運動への参加によって、ある地方では「従来兎もすれば村民反感注視の的となり易い立場に置かれた我々は現在農民との力強き協力の途上にある」(78号〔8年3月〕「会津地方同志の進出」と変わったという。9年末から10年にかけては「農民運動は吾々の運動に於ては特に重視すべき分野であるにも拘はらず、吾々は非常に立遅れをやって居り、従って具体的な運動に就いては今日尚極めて遅々たる歩みを見せてあるのみである」(96号〔9年12月〕「一九三四年を顧る」)が、以前の誤りが「こゝ二、三年の農村同志の農民闘争への参加に依る体験で漸次克服され、現在では積極的な農民大衆への喰込み、大

衆運動への参加がなされ、地方小作人組合の設立、全農や他の農民組織内のフラクション活動が果敢に行はれてゐる」(97号〔10年1月〕「農民運動の現場と我等の動向」と多少明るい希望が見えてもきたのであった。まもなく全国的アナキスト一斉検挙によって農村運動もまた壊滅させられるのであったが。

以上のような思想宣伝から生活に足をすえた闘争へと転換した路線を反映して、活動を一步離れた、農村と都市の対立、労働者と農民の関係等の問題は紙上に見られなくなる。労働者と農民の協力は当然のこととして具体的な中身に触れられず、将来社会の都市の扱いについてはクロボトキン流の農工合体のコミューンで解決済みとされている観がある。この時期、紙上の「重農主義」「農民自治主義」の語は、従来の農民派でなく、村治派同盟以降新たに盛んになってきた右派の農民運動を指して使われているが、農村と都市の対立を論じなくなった原因に、その運動に対する意識が働いていたかとも考えられる。

c) 「農民自治派」「農本主義」批判

自連派では6年前までは「農民自治主義」「重農主義」といえば農民派を指していたが、7年より同じ言葉でも批判する相手が変わった。一般に使われる「農本主義」、右派の運動・思想を指すのである。農民派が分解して旧農民派中のアナキストが犬田流農民自治主義を清算して農民に特殊性をみとめず農民運動をアナキズム運動中の単なる一部門として主張するようになったため、従来の対象が消滅したこと、現実的な勢力としての右派農民運動の進出が顕著であることが変化の背景にある。今回は、かつての全農に対する批判のように単に批判し罵るのみではすまず、自陣営と「農民自治派」、「農本主義者」との相違点を説明する必要に迫られた。なぜならば外部からの農本主義即無政府主義の批評を正さねばならなかったからである。

『自由連合新聞』紙上では具体的な農本主義団体名として、村治派同盟、自治農民協議会、愛郷会、千葉農民自治連盟、茨城農民自治協議会があげられている。農本主義者と新聞の論者(アナキスト)とは、共に農民の自治を主張するところが共通しているが、それ以外は異なるとされている。紙上のいくつかの論文を、論者による多少の相異は無視して合わせまとめて、両者の相違点とされているものを見てみよう。(75号〔7年11月〕「無政府主義と農本主義を／ゴッチャにする／反動の詭弁と…」、71号〔7年6月〕「農本主義の正体」、91号〔9年6月〕(闘ふ農民)「出来ない理屈をならべて農民自治派」()内はアナキストの反論である。

まず現状について彼らは都市と農村の対立を強調し、都市民衆が農民を搾取するという(現在においてはこれを認めるが、その原因は資本主義にある)、農業・農民の特殊性については農業を原生産、他産業を加工生産とし(これは農工分離の肯定になっている、農工合体の社会を建設すべきだ、農業も土地以外の生産手段を必要とするから特殊性を否定する)社会変革の主体と将来社会の基礎を農民のみにおく(回顧的復古的思想で近代的工業、機械生産を退化させるものであり、発展・前進でない。また農民と労働者の連合を妨害す

るものである、農と工に上下はない。一階級の利益でなく全無産大衆の解放をなすべきである。変革の方法としては権力肯定、政治運動への進出をいう（自治をいうのなら議会に頼らず自分たちの力で実現すべきだ、我々は政治・権力を排撃する）、農村と都市の対立に対しては共働農場や消費組合を設けて自給自足主義によって都市を滅ぼそうという者もいる（これは弥縫策である、資本主義制度をなくさねば解決にはならない）。

以上の農本主義者の主張は、政治・権力の肯定否定の問題を除き、従来農民派において、また自連派においても見られたものであることは明らかである。今や自連派はそれを全否定し、かわって、資本主義・権力を廃滅して農工を合体した社会を建設しようという、かなり簡単なアナキズム革命の見通しを述べるに至った。クロポトキンらに顕著な進歩発展への信仰が土台にあるように思われる。科学技術の発展を促す方向か、農業に他産業にはない特殊性を認めてそこに重きをおくか、つまるところはこの2つの道であるとする、この時期のアナキズム農村運動論は後者に対する顧慮が一切なく、完全に前者の道をとっている。

実際の農村運動・日常闘争へ向かったアナキズムは、新しい「農民自治主義」運動に対して次のような分析を加えて、教訓としている。千葉・茨城は農本主義者による運動のさかんなところで、前述した長野朗らの請願運動や米作者大会に多くの農民が参加していた。なぜさかんなのか、茨城は自作自小作が大多数で小作人は少なく、小作争議よりも対政府対金融資本の闘争の方が農民の現実合っているからである。「農民大衆の真の欲求は今日の現実の生活の改善を最も主眼点と」するところへ、非科学的な「権藤主義的日本歴史観……日本主義」がつけ込んだのである。しかも土地共有が農民自治の条件なのに、敵はそれを言わず、欺瞞である。我々は「日本歴史の科学的再認識と土地問題を持ってダラ幹を排撃せよ！」（87号〔8年12月〕「農民自治主義との闘争」）こうして全農等に対すると同様に、農本主義の農民団体にも「潜入」して働きかけるよう提案しているのである。運動において農民にとっての現実的有効性については他山の石とされたのであった。

第6章 農村運動論の考察

第1節 主張の特徴

第5章までアナキズム系の農村運動論を時代を追って、農民派と自連派とに分けて見てきたが、そこに見られる主張をここで整理したい。党による決定やまとまった討論があったのではないから、明確な結論に統一されてはいないが、おのずから特徴的な要素が表われているからである。その際、まず「農」の特殊性の図式をまとめることが便利であろう。

7年以降の自連派、延島英一、自協派のサンジカリストらの論を除く、農民派や自連派の論に見られる「農」の本質的特殊性は次のように分析できよう。

人類に不可欠な食料の生産

1 農業の特殊性

人と自然の関係

他産業に対する基礎産業

2 農耕行為の特殊性

……自然とのかかわり 健全性／宗教性・崇高性

3 農村・農民の特殊性……相互扶助・反強権・反政治

社会的関係

4 農民階級の特殊性……最重要 (1)、最健全 (2, 3)

以下、表に対する若干の説明を加えていこう。

1は農の特殊性の最たるもので、これこそ農業の優位・重要性の基礎となる。第5章までで見たように、これは本質的不変的性格として論じられている。したがって、現在農業に従事する農民が困窮にあえぎ、農産物が工業生産品に比べて安くても、農業が人類生存にとって不可欠で他産業の基礎であることに変わりはない。この点について、農業より工業の方が重要であるとする反論は、延島の生産用具が農耕生産に先行するという議論以外に見られない。1に賛成しない者の多くは、農業と工業の重要性に差をつけることに反対し、共に重要であると述べるにとどまる。他産業に対する農業の優越について問題になるのは富が生まれる源泉である。ケネーらの重農主義においては、農業のみが生産的であったが、農民派はだいたいこれをひきついでているように見える。つまり、労働が価値を生むとする経済学説とは背反する。マルクス主義に立つ論者と農業の優位性を論ずる者とがまったく重複していないのも当然であろう

次に2の農耕行為である。日々自然の中で自然を相手にし自然に合わせて考え工夫しながら栽培する労働は、汚れた空気の中で機械を相手にする労働よりも健康的、健全であるとされ、さらには、自然に対して宗教性を付与して農耕行為を一種の宗教的行為と考える者すらある。宗教まで至らずとも、一般に人為的環境よりも自然的環境の方がよいとされ、それと関わるのが優位性と考えられている。

3は農村を反強権、反政治的、相互扶助の社会と考えるものである。諸論者は人間社会の本来の姿を相互扶助社会と考え、その姿が最も残っているのが農村であり農民であると考えている。また、農耕労働の性質がそれを保障し強めるとされている。しかし農村の現実は今や相互扶助社会とはいえ、都会や地主に対する憧れやひがみがあって農民の精神も損なわれている。それでも都会に比べればより相互扶助的要素が濃いとされている。犬田のみはさかんに現実の農村の都会以上の腐敗を叫ぶが、彼とても本質的には農村社会を良きものと考えていることは前述したとおりである。

4は階級としての特殊性で、主に運動や将来社会像を論じるときに、現在同じく支配される側にあるプロレタリア階級と比較して、農民階級こそ主力となるべきだと論じられる。この場合、3の場合を含めて「農民」に地主は含まれず、農耕に直接的に携わるものの謂である。1から農民階級の最重要性が、2、3から健全でもっとも自主自由の社会を担うにふさわしい素質が由来する。

以上の本質的特殊性とは対照的に、現状は農民がもっとも困窮し農民であることを恥じ、

都会生活を羨望視していた。この現状を改めるには、悪の根源をなくさなくてはならない。悪の根源としてしばしば都市の存在があげられた。都市は資本主義によって存立し、非農民の集まりであり、支配のための権力があるところである。都市と資本主義のどちらが主要な敵であるか、すなわち資本主義をなくせば（かつマルクス主義によらない無政府の社会にする必要があるが）都市は消滅すると考えるか、それとも資本主義体制より都市の存在そのものを問題とするか、論者によって異なっている。前者の考え方より後者の考え方の方が一層農民階級の重要性は大きくなる。概して都市の経済的・政治的・文化的な優越一般に対する排撃がなされ、都市の廃滅がいわれた。都市がなくなった後の理想的将来社会においては、従来都市にいた支配者は存在しなくなり、都市の工場も廃されて労働者たちは帰村する。地域的に自給自足的経済が実現し、工業は農業と融合した形に改められて、労働者は農村の工業に従事するか帰農することになる。この場合もあくまで農業を中心とし農業に重きをおくことを強調する者と、「農工融合」としか説かない者が、派にかかわらず存在した。

農の特殊性を認めた場合とそれを認めない場合とは、運動論において大きな違いが生ずる。特殊性、即ち優位性を認めると、4のような階級的優位性が導き出され、解放闘争は農民を主力とし、労働者は農民に協力する立場になり、レーニンとは反対になる。労働者は自らの存立基盤である都市における職場を破壊するために闘い、破壊と建設を同時に闘う農民のところへ結局は帰っていくのである。特殊性を認めない場合の運動論は、農民が現状において困窮し搾取されている階級であるから闘わねばならないとか、さらにはロシア革命の結果を教訓に、農村運動なしで都市の運動のみによる権力奪取革命では農村の微発・略奪が起き不成功に終わるから、革命を成功させるために農村運動が必要だ、という論になっている。

第2節 農村運動論の成立

農村運動論の成立を考察するにあたって、もともとアナキズム思想を受容しアナキストと自称していたものが農村運動論を論じていく時に前節のような農の特殊性を論じた理由と、アナキズムとは別のところから農民を論じていって、結果的に反政治反支配の自治の思想、アナキズム的思想になった理由とに分けて考えていきたい。系譜的には前者は農村に目を向けたアナキストたちで、自連派が典型であり、後者は農民自治会の非アナキスト、犬田らをさす。むろん両者は同時代に生きた者であるし、大正後半期一昭和初頭には、アナキストを自称しない者もまた、当時漂っていたアナキズム的思想に触れていたことは当然であるが。

アナキストたちが農村に目を向ける前に、何が身につけられていたかを考えてみると、アナキズムに伴うもろもろであったといえる。基礎となる反支配・反搾取・自主自由の指向性、特に日本での影響力の大きいクロポトキンの諸著作、アナキストから見たロシア革命の教訓、ボルシェビキ派との理論的人間的対立、等々がその具体的な中身である。アナ

キストの現実的な闘争基盤は、労働組合が中心であった。それにもかかわらず農業農村重視の傾向があったのはなぜだろうか。クロポトキンが農業を重要視していたことは周知であろう。コミューンは自給自足的傾向を伴うから当然農業が重要になる。コミューンを構想し食物を基本とする消費経済を考察したクロポトキンが食料に注目したことは不思議ではないが、彼の将来社会における農工融合のコミューン像は、農工業生産の技術的発展、たとえば農業では温室栽培等、農業の工業化を想定した上でイメージされている点は注意する必要がある。クロポトキンの、生産力の発展、科学技術の進歩を肯定する傾向が、自連派の人々が最終的に農本とは別の道へ進んだことに影響を与えていると考えられるからである。ロシア革命の失敗は、農村の戦略上の重要性を考えさせ、農村への注目をもたらした。ボル派との対立はボル派と正反対の各論を導いている。ボル派はアナ派に比べて格段に理論的な整理が進んでいたが、それだけにアナ派はボル派の論じるところにはすべて反対論で応じるところがあった。ボル派の工場労働者を前衛とし農民をその同盟軍とする考え方に対する反発から、工と農を対等に、又は農を優位にとする主張もそのひとつの表われである。

以上のような理論と現実の労働組合運動の中に大正末のアナキストたちは置かれていた。労働組合運動による革命構想を純化させた理論がサンジカリストと呼ばれるアナキストによって抱かれていたが、サンジカリズム系労働組合がフランスのように勢力をもたず、また農村人口が圧倒的多数を占める当時においては、アナキスト陣営中のサンジカリストは多数者にはなりえない。現実に目を向ければ、日本の無産階級の多数を占める農民の存在があり、しかも大正から昭和に向けて都市と農村の生活の格差は拡大し、農民の困窮は目に余るようになった。もともとボル派と異なって農村に注目する基礎があったのだから、ひとたび農村へ目を向ければ、その現実に応じて理論が形成されていく。クロポトキンの理論がサンジカリスト以外のアナキストに大きな影響力を持っていたことも拍車をかけた。コミューンを考え自主自治の社会を想定するとき、人間の本性を闘争でなく相互扶助におくとき、今でこそ都会に出てはいるが魂のふるさとを農村においているアナキストたちの脳裏には、澄んだ空気の中で貧しいが互いに助け合う農民の生活が浮かぶのであった。農の特殊性・優位性に向かうことに対する歯止めは、アナキズムには何もない。こうして、農耕の宗教的な崇貴性までは至らないが、それに近づくほどに、社会運動家のアナキストは農の特殊性を説くに至るのであった。

アナキストらの農村讃美のお株が奪われたように、類似する言辞が敵である反動的右派から出され始めるようになったとき、その時はアナキズム運動が実体を失い、新たな再生の道を探っていた時でもあった。まず徹底的に農に重点をおく形で打開策を打ち出したのが農村青年社であった。それはしかし、農青イズムそれ自体の当否とは別のところで自滅していった。その後の自連派の日常闘争重視・現実路線は、農の特殊性とは切り離れたところで進められた。農業恐慌による農村問題即時局問題の時期である。農の特殊性は、日本という国家の特殊性と結合し、農本は日本建国の精神であり相互扶助や自治的社会は

古来の伝統であると主張されるようになった。民衆の自治が天皇の統治と結びつけられ、両者の間に矛盾なしと考えられたのである。今やアナキストは農の特殊性を排しこそすれ、強調することはなくなった。農民も労働者も共に同様に闘争に立つ必要があるとされ、農村は都市と同じく闘争の単なるひとつの場として語られるようになったのであった。同時に、農を強調することは反動的復古的退歩であると考えられた。農の特殊性を排した底から、19世紀アナキストの多くがマルクスと共に分けあった進歩への期待・信仰——前進することは善である、科学技術も社会も常に前へ向かって発展していくべきだ——が露呈したといえよう。

次に、農民・農村を論じ変革の必要性を考えた者が、アナキストと共闘したりアナキズム的理論に達した理由を考えてみたい。たとえば、農民自治会の農民メンバーが自己の状況を突破しようとするとき、農民文学を論じるとき、進むことのできる道は他にいく通りかあったはずである。それがどうしてこうした結果となったのか、なぜ日農・全農へ行かず、なぜプロレタリア文学へ行かなかったのかの問題である。極く初期の日農をのぞき、日農・全農ほかの組合は、まず地主に対する小作争議が中心活動であった。しかし特に大正後半以降、農村における問題は対地主問題に限られなかった。都市の繁栄と農村の衰微の対照が誰の目にも明らかであった。対地主問題のない自作農にとってはこの方が専ら問題となった。都市と農村の対照的状况に対して、ボル派や無産政党の側から納得のいく解明理論、打開策が出されない中で、現実の強力な説得力に押し出された形で反都会論が登場する。農業をしない都会と農業を行なう農村を対比させ、前者が後者を搾取し支配している構造とその不当性を論ずる主張、すなわち農の特殊性の種々の要素が理屈として登場したのである。なお、この時論じられる「農民」は、地主を含めたものとして語られるよりもそうでない場合の方が多いことを断っておく。地主に対する反感ではない反都会的感情をとらえ得ない農民運動に参加せず別行動をとるとき、それらに対する運動組織形態や理論についての批判が理論立てられる。根本においては問題を対地主のみでとらえるか、都市と農村の対照をもとられるかによる差異であるが、枝葉の各論が整備されるに至ったと考えられる。農民の現状を打破し反ボル・反無産政党の感情を抱き、ひいては労働者や知識人の同盟軍としての農民闘争を否定し、上からの指導によらず自らの運動によって農民の解放を考え、今日の都市の存在を疑問視する者たちは、同様の考え方を持つアナキストたちとつながり互いに影響し合ったのであろう。ただし、非アナキストの彼らには、アナキストと異なってこだわらべき歴史的伝統的主義主張がないから、クロポトキンがどう述べていようとアナキスト団体がどう議論しようと無関係に、自由に理論を創造することが可能であった。こうして農の特殊性の理論が整備されていったのである。彼らのうちのある者は、現状打破をめざし反体制的であったのが、のちに現体制とは無関係に見える天皇の存在と、農の特殊性と日本国家との結合によって、農本的指向のままぐるりと裏返されて天皇信仰へ向いてしまった。

以上のようにアナキズムの思想とその担い手の存在、農村の窮乏と農村都市の対照的現実が、農村運動論における農の特殊性の主張の母体となったといえるが、反都会的感情の成立に関しては、もうひとつ西洋から輸入され流行した文明批評について加えるべきであろう。これもまた日本の現実と無関係に流行したわけではなく、当然工業と都市の発達に伴う矛盾が顕在化した上に拓まったのである。既に明治の末頃から、都会の醜悪に対して田園の健全を説いて自然回帰を勧める論が、翻訳・紹介によって知られていた。クロポトキンさえ、アナキズムの革命家としてでなく農本主義的ユートピアンとして受け取られたことがある。シュペングラー、ウィリアム・モリス、カーペンター、トルストイらが大正期思潮の百花繚乱の一面を占めた。これらの文明批評が、都市を亡びゆく忌むべきものとし、農に新しい可能性をみとめたことが、農村における問題を地主と小作人の対立としてのみでなく、農村自体の都市に対立する問題として捉えるよう刺激したことは疑えないところである。

第3節 アナキズムと農本主義

以上の述べてきたアナキズム農村運動論の中の農の特殊性をみとめる主張と、いわゆる農本主義との間には多くの共通点があることが窺えよう。ここでは広く曖昧に用いられる農本主義を、村治派同盟（6年11月3日）、農本連盟（7年3月2日）、自治農民協議会（7年4月9日）のそれぞれ明文化された宣言等に限定して、両者の共通点と相異点を見てみよう。三つを選んだのは、村治派同盟においては農本主義者等が一堂に集まり最大公約数的宣言を発したこと、その中の国家社会主義者等を除いた農本主義者のみが集まったのが農本連盟とされること、農本連盟はまもなく岡本利吉らの先駆者同盟と長野朗らの自治農民協議会に分裂するが、農本連盟は岡本らの勢力が強く、宣言等にもそれが反映しているから先駆者同盟と農本連盟は似たものとして扱うことが可能であり、もう一方の自治農民協議会の宣言を見ることによって両者の主張がわかるからである。自連派が7年以降批判した「農民自治主義」「農本主義」の農民運動は自治農民協議会の運動に属しているので、以上の三つで農本主義運動の凡そは把握できるであろう。

農本連盟が村治派同盟の否定の上ではなく、一層農本の色調を純化させて結成されたように、宣言においても、この両者間に変化はあまり見られない。実現すべき「農本社会」を宣言にみると村治派では「人類の社会生活上、農業が根本基調であることを認め、社会組織も、統制原理も、文化形態も一切が農業を基本として成立するところの共同社会」（長野）と説明し、農本連盟では「我等の生活に農業が根本基礎であることを科学的に証明し、加工や、交換や、政治や、文芸や、教育等々の一切が農村の連合体によって管理される規範の生活組織」となり、似ている。両者ともマルキシズムとファシズムに反対し、農民のみならず全人類の解放をうたっている。ともに、現状の農村窮乏の原因として言葉は異なるが、都市を中心とする「近代都市資本主義」「近代資本主義商工文化」が経済・政治・文化のあらゆる方面から農村を支配し搾取していることをあげ、都市本位の経済・政治・文

化を廃することを目標としている。宣言の段階にはどちらも天皇や国体、東洋といった語は全く見えない。

次の自治農民協議会になると様相は一変する。農本連盟の常務委員であった長野朗、和合恒男、橋孝三郎に、国民解放社の宮越信一郎、全農新潟県連の稲村が加わって結成されたが、ここでは相互扶助や農業中心の社会が日本特有の古代以来の特徴と論じられ、「建国の精神」、「国体の基礎」、「皇室の藩屏」と述べられるようになる。満州への移民もはじめて明らかに姿を現わす。古来からの伝統である農本的自治を、近代の商工中心の営利主義と、自治に反する官治が破壊した、そこでそれらを排す必要があるという。攻撃対象として、都市そのものは影がうすくなり、そこを舞台とする官治・営利の方がクローズアップされる。今や都市に対立する農村というよりも、国家の中の農村として描かれている。

アナキズム系の農村運動論は村治派・農本連盟の宣言と重なり、自治農民協議会のそれと隔たりがあることが、以上で明らかになった。両者の違いは国家・国体の登場の有無にある。論者がアナキストを自覚している場合は当然に反体制・反権力を指向する。アナキストと自覚なくても反体制・反権力を自己の方針と決めている者は同様で、国家のためということに対して警戒心が抱かれるであろうが、そうでない場合は体制の側につくことに抵抗がない。同じく農の特殊性を認めて農を基調とする社会をめざしても体制に対する対応はいくつかありえよう。アナキストがいて体制派がいてもおかしくはない。また、たとえ反体制・反権力を指向していても、「農本」が今日の状況とは切り離された一見非政治的反政治的な天皇制と結びつけられたり、古代社会に存在したと仮想することで「わが国建国の精神」とされることに対する抵抗感は弱く、このルートを通じて戦時下へ向けての転向がなされたともいえよう。

「農本主義」の語を文字どおりの「農本」の主張、即ち農業・農耕・農民の特殊性を認めてそれを基本とする社会を作ろうと論ずる「農本主義」に限定し、農本を古来の伝統や東洋や天皇制と結びつけて語られることについては「農本主義と天皇制」、「農本主義と古代日本像」といったテーマで別々に論ずることにすれば、論議の混乱が整理されるだろうと考える。このように限定した「農本主義」についていえば、両大戦間のアナキズム農村運動論は、時期的人物的例外はあるが「農本主義」が濃いものであったし、アナキストの多くが「農本主義者」であったといえよう。